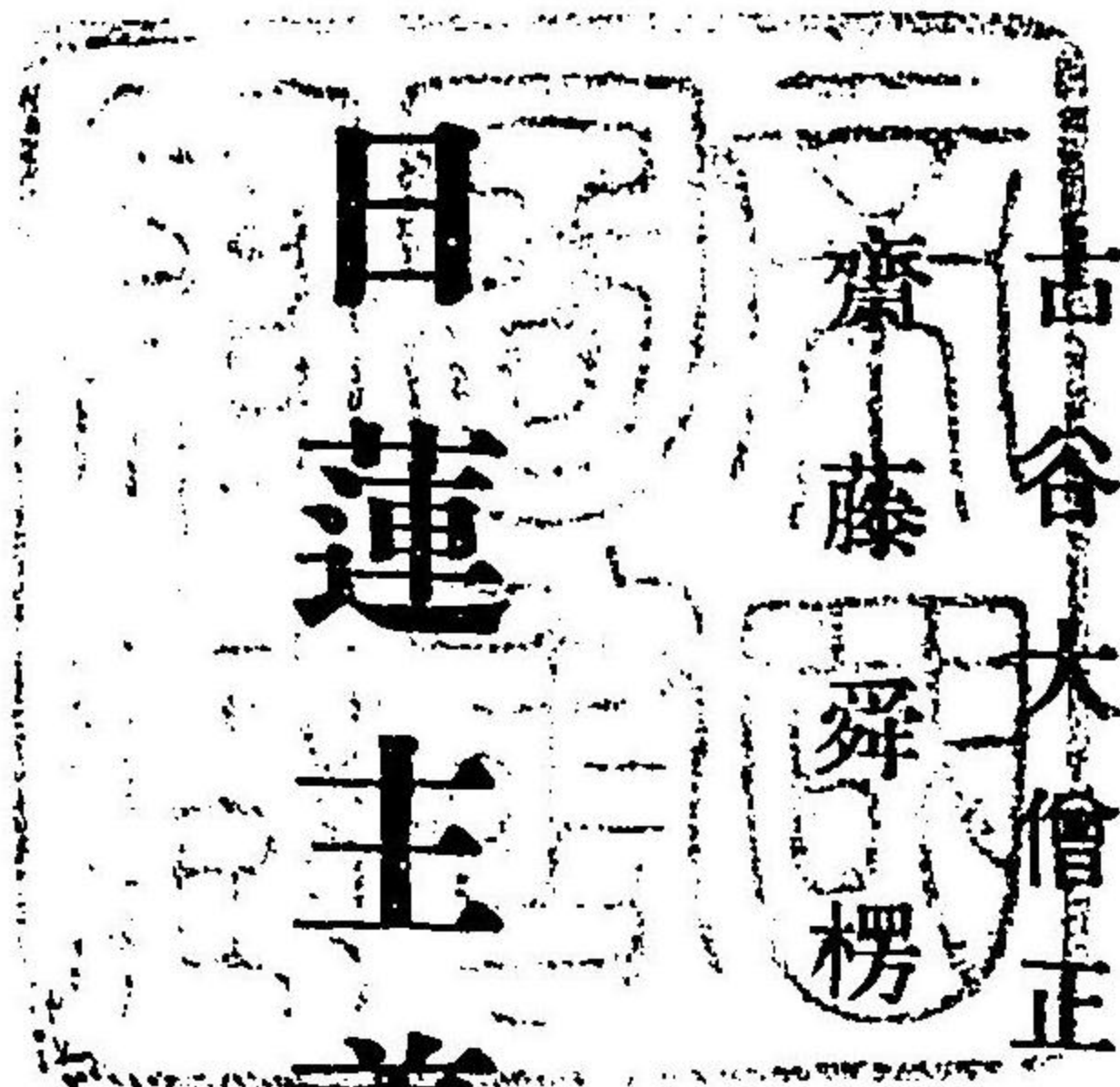


82  
69

目録  
義人  
道德



82-694



古谷大僧正序

著

# 蓮主義之道徳

東京 濱川堂書店

明治  
44. 5. 29  
内交

はしがき

日蓮聖人の立正安國論に

汝早く信仰の寸心を改めて速に實乗の一善に歸せよ、然れば則ち三界は皆佛國也  
佛國それ衰へんや、十寶は悉く寶土也寶土何ぞ壞れんや、國に衰微なく土に破壊  
なくんば、身は是れ安全にして心は是れ禪定ならん、此詞此言信ず可く崇む可し、  
と云ふ一節が有ります、天下國家の泰平長久を祈り、四海の淨化、人類の靈的統  
一を期するのが日蓮聖人の主義です、日蓮主義は無上の修身法です、最良の社會  
改善策です、理想的の世界統一法です、此の汚れた世の中を改善し、墮落せる人  
間を向上せしめて永劫不壞の理想的世界を作らうといふ主義です、從て世の中が  
混亂すればする程益々その必要が殖え、その功果が大きくなつて行くのです、白

二

晝殺人罪が行はれ、言ふも忌はしい大逆徒の出る様な、今の闇黒混亂の世の中を改善しやうといふのには、是を措いて外に何處に依る可き道が有りませう、本書は素と、日蓮聖人の訓へられた日常道德の心得を通俗平易に説明し、初心の人々にこれを知らせ度いといふ目的の爲めに述べたものですが、私の無學にして不徳なる、到底廣大なる日蓮主義の道德を完全に剩す所なく説き盡す事が出来ません、且あまり委しく述べるゝと兎角専門的に互るの嫌ひもありして、日蓮主義の道德といふ表題を掲げ乍ら、それに叶ふだけに充分に説き盡す事の出来ないのは、誠に遺憾に思ふ所です、然し私の述べ方は拙くとも日蓮聖人の教へは深大です、此の僅の書に依つて讀者が幾分でも研究の心を起し、進んで日蓮主義實行の域に入られたなら、私に取つては實に此の上の悦びは有りません、

明治四十四年四月

著者識す

## 序

方今我國民の多くが迷信的宗教に彷徨しつゝある間に、近時日蓮主義を唱ふるの聲四方に起り、法華經の研究に努むる者日に月に盛んなるを見る、是れ蓋し尊嚴偉大なる日蓮聖人の人格を渴仰するに外ならず、國家のため洵に喜ぶ可き事象と云はざる可からず、然れ共その多くは自家の立脚地より焦慮する解釋にして、直に中正純粹の日蓮主義を覺得する者殆ど稀なるを憾む、著者齋藤舜楞爰に見る所ありて、日蓮主義の道德てふ一冊子を梓にす、是れ併ら著者が本宗青年會に於ける演説の筆記に過ぎざれば、これを公にするは本意に非れ共、初心の婦女子輩をして、これに依つて容易く根本的德義の實行を知らしむると共に、法華經信仰の

一

枝折に資せんと欲するのみと言ふ、予其の志を賛し、書して以て序と爲す。

明治四十四年四月

前法華宗管長大僧正 古谷日新

## 日蓮主義の道德目次

第一章	緒言	一
第二章	善惡	一三
第三章	理想	三四
第四章	成佛	四一
第五章	因果	六〇
第六章	自由	六六
第七章	日蓮上人の言行	七三
第一	慈悲	七四

第二	報恩	七九
第三	忠君愛國	八二
第四	孝養	九〇
第五	師孝	九五
第六	夫婦兄弟	九九
第七	正直勤勉	一〇二
第八	剛毅謙遜	一〇四
第九	大義名分	一一〇
第十	醇要統一	一一四

## 日蓮主義の道德

### 第一章 緒言

「人生の目的は成佛にあり」これは三千年の昔印度へ御出現になつたお釋迦様の説かれた、千古に通じて渝る事なき金言です、

吾々は一體どういふ譯があつて此の世の中へ生まれて來たのでせう、又何をする爲にこの世界へ出たのでせう、そして、兎に角この世の中へ出て來た以上は、どう云ふ風にしたらば宜いのでせうか、是等は苟も普通の頭腦を持つた人間ならば、必ず一度は起す可き疑問だらうと思ひます、誰にしても人間である

からには自分人間と云ふものに就いて考へるのが當り前なので、もし己れの身の上の事などは少しも考へずに、どうならうと斯うならうと平氣の平三で、その日その日を送つて行く人があるなら、その人は變挺に悟つてしまつた人か、さもなれば馬鹿です、

斯様に「明日や昨日の事はどうでも宜い、唯その日その日さへ愉快に送つて行ければ澤山だ」といふ種類の人間を指して醉生夢死の徒と云ひます、吾々は兎も角も因縁あつてこの世の中へ出て來たからには、空々寂々にその日を送る鳥や獸の様な人間にはなり度くないものです、第一に我々の生まれた譯と、生まれた上はどう云ふ風にすれば宜いかと云ふ事を知つて、そして、もつと意味のある、生き甲斐のある立派な生涯を送り度いものではありませんか、

「吾々は一體どうした譯でこの世の中へ生まれ出たのでせう」と云ふと、  
「それは過去の業因のためだ」と佛敎では説いてあります、過去の業因とは何かと云ふと、吾々が現在住んで居るこの世界へ出て來る前に吾々が居た世界に於て爲した作業です、すると「前世といふものが果してほんとにあるものだらうか」といふ様な疑が起りますが、それは確にありませぬ、一體人間の靈魂といふものは不滅のもので、三界を流轉してあつちへ行たり此方へ來たり、廻り巡つて居るもので、これを靈魂轉廻と云ひます、この事については後でお話しますから略すとして、その前世に於て爲した事が原因となつて、そのためにこの現在の世の中へ出て來たのです、

そこで次には「それならば、この世へ出た以上は何を目的としたらばいゝか

即ち人生の目的は何か」といふ問題になります、この答は始めに申した通り「人生の目的は成佛に在り」と云ふのです、

通例死ぬ事を成佛すると申します、又成佛とは死んでからの事と考へては、併し死んだからとて、必しも成佛するものでもなく、又死ななければ成佛の出来ないといふわけのものでも無い、成佛とはそんな死ぬとか何とかいふ事とは別の問題なので、成佛とは佛になる事、即ち我々現在の垢穢の人身を超越してもつと立派な常住境に入る事なき金剛の佛身を得る事です、吾々現在の境遇は三界を流轉して居る迷ひの凡夫です、自分には本來定まつて居る佛といふ立派な原籍があり乍ら、定まつた家もなく、ある時は木賃宿に寝たり、或る時は辻堂にねるといふ乞食の様な境界に落ちて了つて居る身です、諸國を流浪して一定の宿

のない中は何時迄たつても乞食で、これならば安心だといふ事はありませんが自分の故郷を知つて其處へ歸り、自分の生まれた土地へ落ちついてそこに住家を求めれば、もう人の軒に立つて怒鳴られたり、路傍に寝て犬に吠えられたりする様な心配はなくなつて了ひませう、吾々が佛になるとは即ちこの宿無しの乞食が自分の故郷に歸つて安住する事なのです、三界を流轉して居る間は何時迄たつても苦痛はなくなりません、佛になつてこそ苦痛去り、大安樂境は來るので、佛とは即ちこの一切俗界の快樂とか、苦痛とか、欲望とか、名利とか、權勢とか、金錢とか、一切そんな相對的な一時的な泡の様な果敢ないものは打ち捨て、了つた、絶對的な永劫滅盡する事なき不老不死の完全圓滿な人間以上の大人間を指して云ふのです、この境界に達してこそ人は始めて生死の流轉を



免れる事が出来るのです、折角人間と生まれて来ても早く佛になる道を講じな  
いと、又何時果つるか解らない放浪の旅路に上らねばなりません、佛になる方  
法さへ求めれば、吾々はすべて生死の相対的な世界から超越して、絶對的の永  
劫界へはいる事が出来るのです、人生の目的は實に是に外ならないので、支那  
の聖人孔子は「朝に道を聞いて夕に死すとも可なり」と教へ、吾が日蓮大聖人  
は「先づ臨終の事を習ふて後に他事を習ふ可し」と訓へられてあります、何れ  
もその意味は、人と生まれた上からは一日も早くこの苦痛に充ちた相對的な身  
を脱して、永劫盡さる事なき壽命を得る様な方法を求めよといふ事なのです、  
此の世界の主は佛陀です、吾々は佛の子です、法華經には「今此の三界は皆  
是れ我有なり、其の中の衆生は悉く是れ吾子なり」とあります、我々一切の

人類はすべて佛から生じたもので、遂には又佛の懷ろにはいつてしまふ可きも  
のです、本來を云へば佛に歸着すべきものが、迷へるが爲めに三界を流轉し、  
生死を離れる事が出来ないのです、

此の宇宙間の根本真理、萬有の根元は妙法で、その妙法が形に現はれたのが  
即ち佛です、だから佛といふものは宇宙の大本たる真理そのもので、一切萬物  
の主、師、親で、絶對無二の覺體です、吾々の主師親なるが故に慈悲廣大で、  
如何にもして迷へる人類を導いて無上の眞道に入らしめやうと苦心されてるの  
です、歴史の上に現はれた釋迦牟尼佛といふ方は昔印度に生まれて法を説き、  
印度に於て入滅せられましたが、宇宙の無上眞理の活現體なる釋迦牟尼佛は、  
常住普遍に存在して、今でも吾々の頭上に宿つてます、吾々はこの久遠の父

たる佛の慈悲に對しても、一日も早く誠の道を求めなければならぬ譯です、それならば、どう云ふ様に行ひをしたならば、吾々は段々佛に近づく事が出来るのでせうか、これが是れから述べ度いと思ふ所なので、吾々が善行は爲よ悪事はするなといふのも、元來成佛が目的なのですから、成佛といふ事を第一の要件として、萬事を決めて行けば間違ひつこなしです、本書の目的も茲にあるので、釋尊の心たる法華經、及びその實行者たる日蓮上人の御遺文により通俗的に日常行爲の心得をお話し申し、日蓮主義の道德の最後の目的たる、成佛に達する方法を、お互ひに研究したいと思ふのであります、

佛教中のある教では戒律といふものを立て、五戒十戒二百五十戒等種々に制禁を作つて、これに従つて戒律を守るのが吾々日常行爲の規範で、これが成佛

の道なりとして居るものがあります、併しこれは決して佛教道德の精髓ではない、戒律なんていふものはあれは昔の事で、正像の時代に於てこそ効果はあつたかも知れませんが、現代の末法濁惡の社會に、そつくり其の儘持つて來て使ふ事の出来る代物ではありません、この日進月歩の忙しい複雑した世の中に、そんな呑氣な戒律なんていふものが、一般に應用の出来るものではないのです、戒律とはつまりこの凡夫の吾々が、日々起す所の種々の煩惱情慾を止めて了つて、涅槃寂靜の理想境に入らうとする手段ですが、併し今の時世にはそんな消極的の引つ込み思案のやり方では、とてもやつて行けるものではない、もつと活動的な積極的の道德律を立てる必要があります、その點に於ては大小乗の戒律などは、とても役には立つものではないので、戒律を立てるならばもつと

手つ取り早い、もつと應用のきくものを作るが宜しい、開顯主義、活動主義、  
醇要主義の法華一乗の道德律こそ、この濁惡の社會に施す可き大戒律なので、  
これを措いて他に求めようつたつて有りつこはありませぬ、

今の世の中は種々雑多な極く混亂した世の中です、殊に今の日本國はまだ過  
渡期を脱しない、萬事が不完全不整頓極まる社會です、道德上に於ても舊來の  
ものは段々衰へて来て、新にそれに代る可き確固した道德が無く、或は昔風の  
頑固一徹の道德を守つてる者があるかと思ふと、日本には到底も通用の出來な  
い様な西洋流を振り廻す人があつたりして、一定の標準とか規範とかいふもの  
が立つて居ません、實に困つた話で、先づ人の行ふ可き方向を示す羅針盤が定  
まつて居なくては、何をしたつて仕様がなひではありませぬか、何よりも先に

まづその羅針盤を立てる必要が有ります、としてそれには外を尋ね廻る迄もな  
い、法華經主義、日蓮主義の道德律こそ以て依る可きの道で、これを捨て、置  
いては何につけても駄目です、人はまづこの日蓮主義の道德、法華經主義の處  
世術を研究して、充分に腹をきめてかゝつてから世の中へ出るが宜しい、私が  
不學不徳をも顧みずこの書を書くに至つたのも、實は自分の力相應に、これを  
世の中のまだ知らない人に知らせ、お互に手を携へて研究し、共に無上の理想  
境に入りたいからであります、

いくら金があつても、又名譽を得ても、それで人間は偉大なのではありませ  
ん、人間の人間たる所以の道を盡し、吾々人間としての目的地の一步づゝでも  
近づかうと努力して、向上の道を進んで行く人がほんとの偉い人なのです、富

貴榮華は一時的の浮雲の様なものですが、向上的の人格は永劫不死のもので、吾々は人と生まれた以上は飽く迄も生き甲斐のある立派な人間にならなければなりません。

## 第二章 善 惡

「善い事をしろ、悪い事はするな」とは昔から今に至る迄、世間一般を通じての萬古不變の道理です、誰も「悪い事をして宜い、善い事などするには及ばない」なんて、云ふ人はありません、元來人の爲す可き行を善行と云ひ、爲す可からざる行ひを惡事といふのですからして、何故善行はしなけりやならぬか、何故惡事はしてはいけないか、など、云ふ事は今更問ふだけ野暮です、所

でそれならばその善と云ひ惡といふのは抑もどう云ふのでせうか、何處からどこまでを善と云ひ、どこから何處までを惡と云ふのでせうか、この問題は一寸見ると極めて雑作のない事のやうに見えて、その實極めて面倒臭い、調べれば調べる程愈解らなくなる六ヶ敷い問題です、人の爲善かれと思つてした事も却つて他人の害となり、自分では確に善い事だと信じてした行ひでも實際には悪い事もあります、だから他人の行ひについては猶更の事で、餘程よく考へてから善惡を云はないと、往々にして間違ひを惹き起します、

譬喩を擧げてお話しすると、先づ茲に一人の乞食があつて路傍に座つて、通る人の惠みを願つて居る、それを甲と云ふ人が見て、此の乞食に金をやつたとします、さうすると他人は是を見て「あの人は善い行ひをした」と云ひ、又常

人も自分は善い事をしたと考へるでせう、又茲に乙といふ人があつて、この人は甲と反對にその乞食を叱り罵つたとします、すると前に甲を賞めた人は乙の爲た事を見て「あの人は悪い事をした」と云ふでせう、今此の二つの例に就いて善悪と云ふ事を考へて見ますと、始の甲が善い事をしたといふのは如何なる意味かと云ふに、金をやつたからその金によつて乞食が安樂に生活する事が出来る、即ち他人の困難な境遇を救つて幸福にしてやつたから善行であるといふ意味です、でその時乞食は金を貰つて非常に喜んだでせう、人を悦ばせるといふ事は無論善い事には相違ありませんが、併しその乞食はその人に金を貰つた爲めに愈々怠者になり、奮發心も何も無くしてしまつて、一生乞食を止める事が出来ずに、極めて下等な生涯を送る様になつたとしたら奈何でせう、云ひ換

へれば甲に金を貰つた爲めにいよく不幸になつたのだから、その時爲た甲の行爲は悪い事でせうか、又甲について考へて見ても、甲は果してどんな心持で金を恵んだのでせう、乞食が困つて居るのを見て憐みの情に耐へず、それを救つてやらうといふ同情の念から施したのでせうか、それとも、乞食に施すのを他人に見せて、あの人は慈善家だと云はれたい爲めにしたのでせうか、前の場合ならば無論善行でせうか、若し後の場合だとすると決して善い行爲とは申されません、

又乞食を叱り飛ばした乙の方に就いて見ると、乙が乞食を見て癪に障つてたまらないので、これを滅茶々に叱り罵つたとしたら悪い事でせうか、さうでなく、乞食に奮發心を起させ正業に就かせたいと云ふ、親切な心から罵つたのだと

したら善行だと云はずばなりません、又乞食もそれがために反つて幸福になつたとすると、金を貰つたよりも叱られた方が善い結果になつた事になります、以上の話はつまらない譬ですが、實際世間には善い事の様に見えて悪事があり、悪い様で善い行爲が澤山にあるものです、同じ物に就いても見る人に依つてそれ／＼に違ふ、違ふといふのは明晰した道德の標準といふものが一つ確固と決まつて居ないからです、もし判然たる標準といふものが一つ定まつて居さへすれば、それに照らして見て、これは善い行だとか、これは悪い事だとか確然と定める事が出来、従つて吾々が世間へ立つても、爲て善い事と爲す可からざる事とを、明瞭に知る事が出来て、決して迷つたり間違へたりすることは無い筈です、要するにその善悪を判別する標準、尺度が必要なのです、

處がその尺度といふものが甚だ定め難い、人に依つて種々に考へ方が違ひます、だから此の道德上の標準、善悪を定める尺度といふものに就いての説が色々あつて、何れがどれだか薩ッ張り解りません、まづ世間一般の人が抱いてる考へは「自分の心で判断して見て、何となく善さ相に見えるのが善で、何となく悪い様に思はれるのが悪である」といふ様なごく漠然とした考へです、稍進んだものでは「世の中の一般の道德に叶ふ様な行ひは善で、それに背く様なものは悪い行だ」位な所、猶一步進んでは儒教の様に五倫五常を立てたり、或ひは小乗佛教の様に戒律を立てたりするものもあります、或は又武士道といふ様な特別な一種の不文律を作つて居るものもあります、そして世間一般を通じて、最も行き渡つて居る考へは「爲めになる」とか「役に立つ」とか云ふ様な、功

利的の意味を含んだ考へ方でありませう、

そこで、以上挙げたもので以て、果して、道徳上の百般の出来事に對して、明確な判断を下して少しも誤る事が無いでせうか、

先づ始めの「自分の常識に訴へて見て判断する」といふ遣り方、これは多くの場合に於ては大した誤まりも無いでせうが、然しごく漠とした曖昧な見方ですから、日々の些細の出来事に對しては間違なしに判断して行けませんが、少し面倒な複雑した事柄に遇ふと、さつぱり譯が解らなくなつて了ひます、これは固よりさまつた話で、尺度にチャンとした寸法が付けてなければ、細かいものを計る事が出来ないのと同じ理屈です、

次に「世の中の一般道徳に適ふ様にする」といふやり方、これも無論正しい

考へです、一般の道徳といふものは是非我々が守つて行かなければならないものなのですから、これを守るのが善で、これに背くのは悪いといふ事は無論の話です、處がよく考へて見ると、その道徳といふものは何かといふに、決して法律の如くに、少しの誤謬も起らない様に判然と定まつて居るものではない、斯かる行爲は善、斯かる行は悪と一々に定められてあるものではない、従つて大體の判定はつくけれ共、細かい込み入つた事になつて來ると、前と同じ様に一々に當て符める可き尺度が不確で、結局はやはり前の様に、常識をたよりに判断する事になつて了ひます、

それから次は儒教の五倫五常ですが茲に至つては成程よくキチンと秩序立つて出來てますが、これとても矢張り極めて大綱のみを示したのであつて、一々

に委細の事を教へてゐるのではない、この大綱を土臺として臨機應變にやつて行くべきものである、併し乍ら時勢の推移につれて道徳も亦多少づゝ變化します、昨の是は今の非にして、今の非は明日は必しも非にあらざると云つた様な譯、従つて五倫五常にのみ盲従して居たのでは到底駄目です、と云つてこれが悪いとは云はない、これは飽く迄も人倫の大道には相違ありませんが、唯これだけでは實行上に不十分だと云ふのです、是非共もつとこれ以上に完全した立派な活動的の羅針盤が欲しいと云ふのです、

扱て小乗佛教の戒律、これも亦決して悪いとは云はない、兎もすれば悪い方へ迷ひ出さうとする人間に向つては、この位のものも或は必要かも知れません、けれ共要するに消極的退嬰的の引つ込み思案でいけない、吾々人間といふものは充分活動的積極的である可きであつて、何處迄も自分の能力を發揮しなければならぬのです、それを唯消極的に「爲す可からず」ばかりを陳列して禁欲主義ばかりを押つ付けられては、到底も耐まつたものではありません、悪い事をしない計りが能ではない、一歩進んで善事を勉める様にしなければなりません、又斯う矢鱈に「爲す可からず」で抑さへつけられては、人間は手も足も出せなくなり、終には枯木の様な、乾物のような、味も風情もないものになつてしまつて、世間は砂漠の様なものになつてしまふでせう、だからして、戒律といふものは無論悪い事ではないが、とてもこれにばかり頼つて行かれる様なものではありません、

次は武士道、是は一種の階級の間に行はれたもので一般的のものではない、



併し今日では大分世間に持て囃されて、外國にまでも知られる様になりましたが、これは一種特別の道徳律で、一種の意味の正義、廉恥、名譽などいふものを以て作りあげたものです、従つて吾々が取つて以て模範とすべきものも少くはありませんが、こればかりでは到底も足りない、普遍的のものでなくして局部的のもので、包括的一般的のものでなくして、個々の部分的のもので、だからこれを以て世の中に處して充分だといふ事はとても望む可からざる事です、或ひは又、人の利益になる様な行ひをせよとか、世の中に爲になる行ひは善なりとか云ふ様に云つて、善悪の差別をつける人もありますが、これも確に正しい考であつて悪い考ではありません、人は必ず世の爲め人の爲めになる様に行はなければならぬ、然し乍らこれで以て善悪を分つ唯一の標準とする事が

出来るかといふに、仲々左様は行かない、この世の爲め人の爲めといふ事も、能く々々考へて見ると随分朦朧したものになつて了つて、すべての行ひをこれに照らして見て善い悪いを定めるといふには、まだ不充分だと云はなければなりません、

それならば、一體何が善悪を計る尺度なのでせう、何に依つたならば判然と間違ひなしに善悪を判断する事が出来るのでせう、

これが是れからお話し仕様とする問題なので、是れには奈何しても、法華經を根本とせる日蓮主義に依らなければならぬのです、

その答は一口に云へば斯様です、「成佛を目的として、それに近づかうとして爲したる行爲は善で、然らざるものは悪である、又これを言ひ換へると「法華

經に従つて爲したる事は善で背く様な行爲は惡である」といふ事です。

凡夫が凡情を以て色々に推し測り、迷つた眼に色眼鏡をかけて見るからこそ色々な議論や理屈が出るので、我見や私情を捨て、了つて、吾々の親たり主たり師たる佛のお言葉に従へば間違ひはないのです。吾々は元來佛から出たもので、否でも應でも佛に歸す可きものです。だから吾々は佛になるといふ事が、その一生の理想、目的であるので、この世の中へ出ると共に、否その前から既にチャンと約束濟になつて居るのです。だからして吾々の日々の行ひに於て「斯うすれば佛になる道に近い斯くやれば、自分を佛に近づかせる事が出来る」と考へて爲た事は善なので、これと反對な考へで爲た事は惡です。此の「佛になる」といふ事については後に悉しくお話しするから略しますが、兎に角これ

に依つて善惡の判断といふものを下す可きものなので、この佛になる方法を説いてあるのが法華經ですから、その法華經に背けば惡行で、それに合する様にして行けば即ち善だといふ事が出来るのです。

そこで、「何故成佛に近い行爲は善で、それに背く様な行爲は惡か」といふお話は次に譲りまして、その前に一寸行爲といふ事に就いて少しく述べませう、吾々が善だとか惡だとか、道徳上から見て判定を下すのは、抑々何者に對してせう、何を相手として善いとか惡いとか云ふのでせう、と云ふとそれは云ふ迄もなく人の行ひです、六ヶしく云へば行爲です、

普通に行爲といふと、人が何かある事をする、その外に現はれた形を見て、これを行爲と稱して居ます、併し嚴密な意味で云ふ時は、行爲とは内部に於け

る動機と、外部に現はれた所の動作と、この二つを稱して行爲と名づけるので、その動作といふものは無論解り切つた、人のこの肉體の動作ですが、その動機については少し説明が要ります、

普通世間で云ふ動機は、機會とかはずみとかいふ意味に用ひられて居ます、例へば茲に一人の人があつて、自分の兒供を失つて悲嘆のあまり、菩提心を起して信仰の道に入つたとしますと、世間の人は是を見て「彼の人は兒供を失つた事が動機となつて信仰の道に入つた」と申します、併しこの場合に用ひられた動機といふのは、道德的の意味に於ては、ほんとの動機ではないので、實は機會とかはずみとか言ふ可きものなのです、即ちその人は、自分の兒供を失つたといふ事が機會になつて、信仰の道に入つたので、動機ではないのです、道

徳上で云ふ動機といふのは、ある行爲をする時の心の中に於ける意志決定なので、斯う云ふ事を仕様と心中に於て決定したその意志を指して動機と言ふのです、例へば道を歩いて居て四ツ角へ來た右へ曲らうか左りへ曲らうかと考へるそして遂に右へ曲らうと決心して、その方へ足を向ける、その時の右へ曲らうと決心した、その意志決定が動機なので、それが肉體の運動となつて右の方へ足が向くのです、云ひ換へれば、身體の動作を起す内部の原因なので、動作は外部に現はれた行爲で、動機は内部に於ける行爲です、道德上で云ふ行爲とはこの身體の内と外とに於ける、動機と動作とを合はせて云ふので、動機のない動作、即ち無意識的に爲た事とか、酒に酔つて前後不覺になつてした事などは完全な意味で行爲と言ふ事は出來ない、此の行爲といふものを心理的に云ふ時

は、まづ一の行爲を爲す前には、その仕様とする所に就いて考へる、そして爲しても宜いとか悪いとか考へ、そして遂にそれを仕様と決定する、次にはそれを爲しようとする努力の心が起る、それが今度は筋肉の運動となつて外部に現はれるのです、行爲といふのには是れ丈けのものが必要なのです、そしてその動作によつて惹き起した現象を行爲の結果と申します、

吾々が善とか悪とか判断を下すのはこの行爲に對して、これだけの要素を含んだ行爲といふものに對して善悪判断を下すので、動機のない單純な動作例へば夢の中に於て爲た事や、無意識の運動や、泥酔して爲た事や、他から強制されて無理やりにさせられた事などに對しては、道徳的には善とも悪とも云ふ事は出来ないのです。

それならば、上に擧げた場合に於ては全く善悪の判定を與へる事が出来ないかといふに、左様ではありません、今、善悪判断を下す相手は行爲であると申しました、そこでその行爲といふものは、何處から出て來るものかといふと、その人からです、その人の人格からです、即ちある事について、それを爲ようと意志決定をするのはその人格ですから、もし人格の高い人ならば、決して悪い行爲はしない筈ですし、人格の低い卑しい人からは悪い行爲は出る筈です、だから行爲とは人格の外へ現はれたもの、謂はゞ人格の寫眞です、行爲と人格とは決して離す事の出來ないものです、だからして上に擧げた場合に於ても、その爲した事は完全な行爲と名づける事が出來ない、單に動作に過ぎないのですから、それに向つて道徳的に善悪の斷定を下す事は出來ませんが、そんな卑

しい悪い動作を起す様な低い卑しい人格に對しては、これを惡といふ事が出來ます、だからたとひ無意識にしる何にしる、卑しい事をすればやはり道徳上から善とか惡とかいふ事が出来る譯です、

そこで今人格といふ語を大分使ひましたが、この人格といふ事を、つまらない下らない意味に誤解して居る人があります、即ち神とか佛とかいふ靈體から一等地下つた、種々の束縛障礙から脱する事の出來ない、果敢ないつまらないものといふ様な意味に考へる人があります、併しこれは大違ひで、人格とは人の人たる所以のもの、即ち人間の精髓で、この肉體は亡びても決して滅する事のない、人間の一番大切な原料です、人間はいくら偉らくなつてもこれを脱する事は出來ないので、人間がその最高點に達して、出來得る限りの最もえらい

所に至つて、佛とか神とか名づける様なものになつても、人格は何處迄も人格で、その人格の發達の最高點に、佛とか神とかいふ名をつけたに過ぎないので、人間の達し得る限りは、何處迄行つても人格です、

それから、世の中には行爲の結果のみを見て、それでその行爲の善惡を定める人もありますが、これは決して正しいやり方ではありません、やる當人は善行をする積りでも、その結果が悪い事もあつし、悪い目的で爲た事も善い結果を惹き起す事もあります、又結果といふ事に就いても色々あります、ある行爲に依つて起つた事柄をその行爲の結果とすれば、随分曖昧として居て、何處迄がその行爲の結果だか解らない事になります、斯様に結果にも必然の結果あり偶然の結果あり、直接間接の結果と色々にあるのですから、それに依つて行爲

の善悪を判じ様といふのは無理です、それなら、結果はどうでもい、動機さへ善いなら宜いかと云ふに左様でもありません、同じ行為が二つあるとしたら、善い結果を生じた方は、それより悪い結果を生じた行為よりも、善であると言はなければなりません、斯う云ふと矛盾した話の様ですが、善い結果を生じた方は、行為をする前に斯様な結果を生ずるだらうと豫期した事が正しかつたのだし、それでない方はその豫期が當らなかつたのだから、この時には、正しく豫期する事の出来た人格の方が、誤つてる豫期をした人格よりも、道德的に立派である、即ち善であるといふ事が出来る譯です、

吾々が善悪の判断を與へる對象は何者であるかといふ事は、これで大抵お解りになつた事と思ひます、以上述べた事を簡略に申せば、「吾々の目的とする所は成佛にある、従つて成佛といふ動機より生じた行為は善で、然らざるものは悪である」といふ事になります、これが我々人間の守るべき所の道德の大本なので、日蓮主義に於ては、善悪とはこの外に無い筈です、そして此の見地の上に立ち、この大綱を握つた上は、世間一切の道德律は、苟くもこの主義に反しない限りは、悉く皆用ゆる事が出来、一切の道德もこの大主義に包容されてこそ、始めてその眞の光彩を放つ事が出来るので、既に法華經の中には、「若し俗間の經書、治世の語言、資生の業等を説かんも、皆正法に順ぜん」と説いてあります、

これで善悪といふ事に就いては大體述べました積りですからして、次には「成佛」とは何であるか、又、何故成佛の動機より出た行為は善であるか、といふ

事に就いて、少しくお話し仕ようと思ひます、

### 第三章 理想

人と生まれたからには是非共ある理想を抱いて居なければなりません、現在の吾々人間は實に不完全なものです、誰人と雖、この現在の有様を以て充分だとして、満足して居る人はありません、既にこの現在の有様が不完全なもので、吾々はこの状態を以て満足する事が出来ないとする、従つて我々はもとと完全圓滿な立派なものを心の中に描き、それを目的物として、絶えずそれに向つて奮勵努力しなければなりません、その向ふに在る目的物を名づけて理想と申します、人は必ずこの理想といふものを持つて居なければならぬもので

理想のない様な人はとても駄目です、理想はなる可く高ければ高い程宜いので一日に二十里歩かうと思つても、十二里か、精々十五里位しか歩けないもので、それを始めから十里歩けばいい、なんて云ふ考へで歩き始めては、七里も歩けば日が暮れて了ふでせう、昔、毛利元就がまだ若くて、勢力も何もない頃、嚴島明神に參詣した時に、元就は家來共に向つて「お前達は何を神に祈つたか」と聞きますと、家來共は皆「貴君がこの中國の主になる様に祈りました」と答へると、元就は是を叱つて、「何故乃公が天下の主になる様に祈らない、始めから中國の主になる考へでは、精々一箇國も六ヶ敷からう」と云つたといふ話があります、元就はこれだけの抱負を持つて居たので、遂には中國十箇國を領する様な身になりました、始は大將になるつもりでも、やつと大佐位で終つ

て了ふのが普通です、始めから大佐を心掛けて居たら、大尉にもなれますまい、だから古の人も、志は高からんを要すと云はれて、理想はなる可く大きければ大きいだけ、その人はえらいのです、と云つて無茶苦茶な法螺や空想では困りますが、高い理想を抱き、それを實現しやうと絶えず努力して居る人が偉いのです、金や權勢や學問ばかりが、いくら有つても、それで人間がえらくなる譯ではありません、

各人各個について云へば、ある人は天下の宰相となつて、天下の經綸を掌りたいと望んで居る人もありませうし、又ある人は大實業家となつて、世界の實業界を自分の考へ通りにして見度いと考へてる人もありませう、或は又左様云ふ物質界の方面でなく、學術とか、藝術とかの天地に活動して、天地の秘奥を

啓きたいと云ふ様な理想を持つてる人もありませう、併しこれらは詰まる所、各人各個の希望で、萬人が萬人それぞれに皆別々のものです、吾々人間として生存して居るからには、それ以上に「人としての理想」と云ふものを持つて居なくてはなりません、

巨萬の富を得たいと願ふ人は、何故巨萬の富を願ふのでせう、百萬千萬の富を得て扱てどうするのでせう、天下の宰相になりたいと望む人は何故天下の宰相を理想とするのでせう、天下の宰相になつて扱てどうするのでせう、單に巨萬の富を得たり、天下の權を掌中に握つたりするだけでは、甚だ意味のないものでせう、それ以上にもつと立派な根本的の理想といふものが無くてはなりません、即ち人として生まれて來た以上は、人間として當然有すべき理想を抱



かねばなりません、云ひ換へれば、人の人たる所以、人間が萬物の長として  
價值のある所以の道を明かにせねばなりません、單に物質界に拘泥して居たの  
では、人間は偉くも何ともありません。

扱てそれならば、その人間終極の目的、理想とは抑々何でせう、この問題  
は極めて大切な重大問題であつて、古來種々の人達によつて研究されて居る事  
です、その人生の目的理想を究め、それを明かにしてそれに従つて、それを向  
ふの的として進めば、決して間違のないものです、それに近づけば近づく程、  
人間は偉くなるのです、

然らばその人生の理想とは何であるかと申すと、それは前には既に述べた通  
り成佛といふ事です、即ち人は皆佛にならんがために、この世の中へ生まれて

来たので、又この世の中へ出た以上は、必ず皆佛になるといふ事を目的として  
それに向つて努力すべきもので、これに違反する人は、假令世間的には偉いと  
か何とか云はれても、人間の人間たる道から云へばえらくも何ともない、極め  
て價值のないものです、たとへ其の職業は何であらうが構はない、商人でも、  
學者でも、工業家でも、軍人でも、百姓でも、車力でも、僧侶でも、政治家で  
も、そんな事は少しも構はない、唯この人生の理想といふ事を常に念頭に置い  
て、それを實現しようとして勉めて怠らない人がえらいのです、職業は人が生活す  
る爲の手段ですから、皆平等同價值のもので、そして職業と理想とは別です  
又一緒です、と云ふと何だか斯う詭辯の様ですが、然し人が各々千差萬別の職  
業を有して、それに依つて生活して行く、それを離れては理想も有るものでは

ないので、人生の理想を實現し目的を達するには、その各々の職業に依つてやるのですから、その職業は等しく人間に取つては同じ様に價値のあるもので、決して高下の別のあるものではありません、この意味に於て労働は神聖なりと云ふ事も出来ませう、で大臣は人生の理想を實現せんが爲めに政治を行ひ、實業家は人生の目的を體現せんが爲めにその業に従ひ、天下萬民皆この心を以て心としたならば、それこれ天下泰平國土安穩、四海波靜かに、この世からなる寂光淨土、理想的の黄金世界が實現せられるでせう、人間としての目的は實にこの成佛にあるので、社會としての理想は實にこの黄金世界に外ならないのです、

#### 第四章 成佛

前章に於て、人生の目的は何ぞ、と問ひ、成佛であるとお話し致しました、然らばその成佛とは如何なる事でせう、これが解らなくては何事も解る譯は有りません、これから成佛といふ事に就いて、少しくお話しして見ようと思ひます、

成佛とは何ぞやと云ふと、讀んで字の如く佛になる事です、佛身を成就するといふ事です、世間ではよく、死んだ事を成佛したと云ひ、又死なねば成佛の出来ない様に云つてゐますが、それは大きな間違で、たとひ死なずともそれだけの修行をすれば佛になる事が出来るのです、一體人間といふものは、佛になる

べく作られてあるものですから、

諸君が夜戸外へ出て天を仰げば星斗が燦爛として輝いて居ます、春は花咲き、夏去れば秋風吹き、鳥は飛び、獸は走り、萬物生々として皆その宜しさに従ひ秩序整然としてチャシと一定の筋道が立つて居ます、これは此の宇宙萬物を支配する所のものがあからで、その宇宙間を支配し、宇宙到る處に遍在して、萬物を生成する所の一大真理、一大理法を名づけて妙法と申します、その妙法の化身、妙法を活現せる所の一大靈體を佛陀と申します、佛陀は無始無終永劫不滅のもので、この宇宙法界の生成者、所有者、支配者です、我々一切萬物は皆この佛陀より生じたるもの、従つて皆佛陀の司配をうけ、遂には又佛陀に歸入すべきものです、人間界にありとあらゆる眞善美など云ふものは、皆佛陀の

一面です佛陀は實にこの絶對眞、絶對美、絶對善の一大融合體で、吾々はこの佛陀を本としてこそ、眞善美と云へるのです、

そこで、その妙法に依つて證得し、佛陀を身に體現してこの世に現はれた人が即ち、三千年前印度に生まれ印度に死んだ釋迦牟尼佛といふ方です、釋迦といふ方は唯の人ですが、この宇宙の本體たる佛陀を身に活現し、自ら佛陀となつて宇宙の眞理たる妙法を説かれた釋迦牟尼佛は、常住永劫の絶對的靈格です、壽量品には「我實に成佛してより已來無量無邊百千萬億那由陀劫」と説いて無始永劫の眞理を活現せる身の壽命測る可からざる事を述べてあります、その釋迦牟尼佛の説かれた教々は澤山ありますが、法華經を除くの外は皆對機説法と云つて、人を見て法を説けの、方便の教で眞個の眞理ではない、法華經こそ宇

宙の最上絶對の眞理たる妙法を説いた經で、一切のものは皆これに依つて司配さる可き大法です、

扱て斯様な次第で、我々は皆夫々に心の中に佛陀を持つて居るので、これを己心の佛性と申します、己心の佛性とは即ち、人間の心の中に生まれつき具はつて居る「佛になる可き種子」といふ事です、吾々はたとひどんな人でも、皆この佛になるべき種子といふものを持つて居るので、この種子を培養して段々に生長させれば、遂には枝葉茂り花咲いて、立派な佛果と云ふ實を結ぶに至るので、前々から度々申す成佛とは、即ちこれに外ならないものなのです、

此の己心の佛性といふ事を説明するには、まづ一念三千といふ事をお話しせねば解りません、一念三千とは手短かに申せば、この我々の一念に、この宇宙

法界の森羅萬象を悉く具へて居るといふ事なのです、先づ佛教に於きましては、この世界を三種の世間（衆生世間、國土世間、五陰世間）に分ち、一切有情界を十界に別つて居ます、即ち、地獄、餓鬼、畜生、修羅、人間、天上、聲聞、緣覺、菩薩、佛の十界です、この十界を以てあらゆる生類を説明し分類する事が出来ます、併しこの十界も、十界の各々が各自獨立的に存在して居るのではなく、地獄から菩薩迄の九界は、實に佛界から出たものなので、眞の實在體は佛界ばかり、餘の九界は權、即ち假りの姿で、幻化に過ぎないものです、しかも無明煩惱のために覆はれて、佛界の實體を現する事が出来ず、九界を展轉し、三世に輪廻して居るのです、そして此の十界といふものは皆各々の身に具へて居るものです、日蓮上人は觀心本尊鈔の中にこの事を能く説明されてあります、

吾々の身體について十界を話せば、嗔恚の心即ち怒つた時は地獄界で、貪婪すなはち貪るのは餓鬼界の心、愚癡は畜生界、諂曲は修羅、平和は人間界、喜樂は天上界、無常を觀ずるは聲聞、緣覺の二界、慈愛の念を起す時は是れ菩薩界の心です、以上九界であとは佛の一界ですが、こればかりは仲々普通には現出しません、併し立派な人になるとこれを見る事が出来ず、例へば支那の昔の天子の堯帝舜帝といふ人は、非常に厚德の方で、萬民に偏頗がなく、よく天下を治められました、能く治まつて、少しも事のない世を堯舜の世と云ふ位ですから、この二帝の如きは佛界の一分を現じて居ると云つても宜しいでせう、斯様に十界といふものは皆吾々の一身に具足して居るものです、この十界は別々のものと見れば別々ですが、更に進んで考へると、悉くこれ佛界より出で、佛界

に歸入すべきもので、佛界の外に九界なく、九界の外に佛界なく、九界即佛界、佛界即九界となるのです、

この十界は皆我々の一念に具はつて居るのですが、この十界は又その各々に十界を具へて居ます、即ち合せると百界です、この百界に又各々十如といふものがある、十如とは法華經方便品の中に説いてある、如是相、如是性、如是體、如是力、如是作、如是因、如是緣、如是果、如是報、如是本末究竟等、の十を指して云ふので、これは即ち物の性質始終等を包括したもので、相とは即ち外部から見て分つ事の出来る姿で、性とは内部の性質、先天的に具はつて居る持前で、體とは物の本質本體で、力とは能力作用で、何かする事の出来る力、作とは造作經營、物を造る作業です、因とは原因、緣とはその因を扶け、助長さ

せる所のもの、果とはそれから生じた結果、報とはその果が事實の上に現はれて来た報酬です、そして最後の如是本末究竟等といふのは、上に述べた九つが終始本末整然として、少しも差はず公平を保つ事を云ふので、すべて何事について見ても、この理法に従つて少しも外れる事はないのです、

この十如是が前の百界に具足する時は千如となり、これを三種の世間に配當すれば即ち三千となるので、この三千が各々の一念に具足して居るといふ事は一念三千と申すのです、この一念三千の不可思議の法をば妙法と名づけ、この妙法の説いてあるのが法華經です、

天台大師の止観には「若し心なくんば止みなん介爾も心あれば即ち三千を具す」と説かれてあります、この吾々の一念はこれを放つ時は即ち三千となつて

宇宙法界を攝盡し、これを收むる時は悉く皆自己の一念に具足して居る事になります、そしてその三千の究竟する所の絶対境は佛の境界にあるので、即ち佛とは眞善美の融合體で、八面玲瓏。自由自在、無始無終、無障無礙で、永劫滅びる事のない實在體です、この立派な佛になる可き種子は、吾々の一念の中に存して居るのですからして、これを培養ひ、生長させれば、この立派な佛界が出現するので、成佛とはこの心の中にある佛性を發揮する事なのです、  
法華經には「今此の三界は皆是れ我有なり其中の衆生は悉く是れ吾子なり」とあります、吾々は佛の子です、佛から出たもので、聽ていつか一度は佛になるべきものです、と云ふのは理屈ですが、實際は佛になるのは仲々容易ではなないので、吾々が六道に展轉し、苦を見ても苦と感ぜず、果敢ない虹の様な觀樂

にあくがれて、浮草の様な根柢のない浮世に住んで居る間は、何時迄たつても佛になるどころか、悪道に呻吟しなければなりません、自分の身體に佛性を具足せる事を悟つて、一日も早く佛の境界を實現せん事を心掛け、その方法を講じなければ、この苦痛から遁れる事は、到底も出来ないので、「三界は安き事なし猶火宅の如し衆苦充滿して甚だ怖畏す可し」とは法華經の金文です、この假りに幻化に過ぎない世を實體の如くに見做して、これに執着して居る中は、いくら威張つても駄目です、金剛不壞の佛身を成就してこそ始めて安心といふ事が出来るのです、持法華問答抄には「寂光の都ならずば何くも皆苦なるべし本覺の栖を離れて何事か樂みなるべき」と説かれてあります、世界の人達が皆これを目的として、吹く風枝を鳴らさず、雨、土壤を碎かず、五風十雨、四海

波靜に治まつて、世界に悪など、いふもの、跡を絶つた時こそ、即ち事の寂光で、國土の成佛とはこの事です、眞の愛國者とは自分の國をこの状態に導かうと努力する人を指して云ふのです、又人々について云へば、煩惱のために累せられず、佛になるだけの資格を得た人ならば、その人所住の所が即ち寂光淨土で、たとひその人が紅塵萬丈の都の中央に住んで居ようが、豆腐屋へ二里、酒屋へ三里といふ邊鄙な所に居ようとも、そこが其の儘寂光の本土です、だから極樂淨土といふものは決して客觀的に他に求む可きでなく、主觀的に自己の身の上に於て求む可きものなので、淨土に住む可き資格のある人に取つては、その人の住んで居る所がそのまま、寂光の都です、佛とは今の語で云ふと、完全圓滿無垢の究竟的人格といふ事です、人間の

精髓、人間の達し得る最高點です、己心の佛性を發揮すると云ふのは、人格の極點、人間の人間たる所以の道を發揮して、その行き止まりまで達せしめる事です、成佛とは即ちその人間の究竟的人格を發現して、完全無垢なる不死不滅の人格とする事です、相對的の世間ありふれた安ッポイント人格は死滅する事があるかも知れませんが、この境に達した絶對的の最高至上の人格は、決して亡びる事のない常住不壞のもので、尤も斯かるものを人格と名づける事には語弊が有るかも知れない、この境地に達したならこれを人格と稱する事が出来ないかも知れませんが、佛格とか靈格とか云はねばならぬかも知れませんが、併し人間の達し得る範圍内である限りは、矢張り人格と云つても差支へはあるまいと思ひます、

吾々はこの佛を目的とし、その方に向つて一直線に進む可く作られたる馬車の様なものです、まづ直ぐに進みさへすれば間違ひなく、この佛の境地へ達する事が出来るのですが、兎角馭者の云ふ事をさかないで、横に逸れたり、道草を食つたりするので、何時迄たつても目的地へ着く事が出来ません、扱て是れ迄お話し仕た事に依つて、我々の理想とすべきは成佛で、生まれ乍らにして是れに向つて進む可き様に出来て居るのだといふ事は、大體お解りになつた事と思ひます、そこでこれが最後の目的なら、吾々は飽く迄もこれに向つて進み、少したりとも其の方へ近よる様に、出来る限りの力を盡さなければなりません、従つて此の、佛になる、といふ理想を實現させる事の出来る様な行為は善で然らざるものは、悪だといふ事になります、吾々の道德の最後の目



的は成佛、即ち絶對善の境地に至る事です、だから己心の佛性を發揮させよう  
 といふ動機から出た行爲は、道德上から見て價值があり、然らざるものは價值  
 が無いといふ事になります、例へば同じ怒るといふ事に就いて見ても、茲にあ  
 る暴悪な人があつて、弱い者を虐め、その人格を蹂躪するといふ様な場合に當  
 つて、その弱者の人格を保護し扶けてやるのが、自分の務めだ、自己の佛性を  
 發現せしむる所以だとして、奮然として起つて、その暴者を摧き倒すのは善行  
 ですが、唯自分の私利我慾のために他人と争ふたり、自分の利益を害されると  
 て矢鱈に怒つたりなにか爲るのは悪いと云はねばなりません、  
 吾々が平生の行動についても、悉く斯様に判斷して善惡を別つて行くべきな  
 ので、若しある行爲が成佛の動機から出た行爲ならば善で、然らざるものは惡

だとして行けば差支へないので、これこそ善惡判斷の標準、道德上の最後の目  
 安で、この見地の上に立ち、この尺度を握つた上は、一切の道德法は悉く取  
 以て用ゆる事が出来ます、  
 抑々法華經には、身口意の三業といふ事があります、この三を完全に行じて  
 こそ、始めて、眞に法華經を行ずるといふ事が出来るので、吾々の最後の目的  
 に達する事が出来るのです、日蓮上人は「法華經を餘人の讀み候は、口ばかり  
 語ばかりは讀めども心はよまず、心は讀めども身によまず」と仰せられて、法  
 華經の修行は、口にお題目を唱へるばかりでは駄目だ、行住座臥悉く法華經的  
 に行ふ可しと訓誡せられ、法華經的に言ひ、法華經的に思ひ、法華經的に動作  
 をしてこそ、理想は得られるものであると教へられてあります、

そこで一寸述べたい事は題目修行の事です、道徳上からは別に關係のない様な事ですが、併し最後の目的たる絶對善に至るの道ですから、一方から云へば最も大切な道徳法です、世間の人達はお題目を唱へるといふ事を、何だか迷信的の事のように考へてますが、大きな間違ひで、これは非常に大切な、世間の科學などでは到底解釋のつかない、云ふべからざる神秘的の感應のあるものです、唱法華題目抄には、

今法華經は四十餘年の諸經を一經に收めて十方世界の三身圓滿の諸佛をあつめて釋迦一佛の分身の諸佛と談ずる故に、一佛一切佛にして妙法の二字に諸佛皆收れり、故に妙法蓮華經の五字を唱ふる功德莫大なり、諸佛諸經の題目は法華經の所開也、妙法は能開なりと知りて法華經の題目を唱ふべし、

とあります、又四信五品抄には

妙法蓮華經の五字は經文にあらず、其義にあらず、唯一部の意のみと説かれ、聖愚問答抄には、

されば一遍この首題を唱へ奉れば一切衆生の佛性が皆よばれて茲に集る時、我身の法性の法報應の三身ともにひかれて顯はれ出づる是を成佛とは申す也例せば籠の内にある鳥の鳴く時、空を飛ぶ衆鳥の同時に集まる是を見て籠の内

の鳥も出でんとするが如しと説き示されてあります、唱題修行といふ事には實に深重な意味があるので、爰で手短に論ずる事の出来るものではありませんから、略しますが、要するにこれが成佛に至るの第一の道で、法華經の道徳では最も大切な、絶對善に至るの

道です、早い話が、法華經を信じて朝夕お題目を唱へる人に悪い人はありません、盗賊をしたり、人を苦しめたりするのは、法華經を信じ行じない人の中から出るので、朝夕お題目を唱へてる人には悪い事の出来る譯のものではないのです、法華經の阿羅尼品には

汝等但能く法華の名を受持せん者を擁護せんすら福量る可からず

と説いてあります、題目修行といふ事には實に人知を以て計り知る可からざる廣大無邊な功德のあるものなので、唱題修行といふ事それ自身が、已に日蓮主義の道徳では善だといふ事が出来るのです、

唱題修行については右述べた通りですが、更に大切なのは日々の行爲です、口でばかり妙法を唱へても、實際に行はなければ駄目です、行住座臥一舉手一

投足、悉く法華經的に行じ、法華經的に振舞ふて、こそ絶對善の境界に入る事が出来るのです、「心の欲する所に従つて規を越えず」と孔子の云つた様に、無意識に爲た事でも悉く法華經的になれば、そこで即ち佛の境界です、法華經を一字一言實踐躬行して行く事を、法華經を色讀すると申します、色とはこの身體の事で、即ち自己の身に法華經を讀むといふ事です、日本の歴史あつて以來法華經を色讀して剩す所のなかつた人は實に日蓮上人です、上人御一生の行動は悉く法華經から出たので、日蓮上人の御傳記は丁度法華經を讀む様なものです、四菩薩抄には

總じて日蓮が弟子と云ふて法華經を修行せん人々は日蓮が如くにし候らへと仰せられてあります、吾々は日蓮上人の様に行へば決して間違のないものな

ので上人は實に吾々後代の人間にとつて、最も價値のある活きた手本です。人間の爲す可き道を最も完全に行はうと思へば、上人の爲された通りを眞似すれば、決して間違はないものなのであります。

## 第五章 因果

原因があれば必ず結果がある、ある事をすればそれに対するだけの結果は必ず現はれます、因果といふ事は、獨り佛敎で説くのみならず、世の中のすべての事は悉く因果の法則に従つて、外れる事のないもので、石を抛れば何處かへぶつかる、風が吹けば波が立ちます、積善の家に餘慶あり、積不善の家に餘殃ありとか云ひますが、これは動かす可からざる眞理で、善行をすれば必ず善い

酬いが來、悪行には悪報が來るに極まつたものです、すべて原因あれば結果あり、結果あれば必ず原因がある、これを因果律と申します。

吾々が何かある事をすれば、その自分のした事については充分責任を持たねばなりません、従つてその行爲から生じた結果に對しても、自分にそれを受けだけの義務があります、これは因果應報の道理で、若し左もなければ、悪い事をして罰を受けず、善行をして善い酬いのない事になり、世間の秩序も何も滅茶々々になつて了ふでせう。

人といふものは、ある事をする前には必ず斯うすれば斯うといふ豫期を以てかゝるものです、誰やかも「斯くすればかくなる事と知り乍ら、ひくにひかれぬ大和魂」と歌ひましたが、善にしる惡にしる、必ず豫期といふ事をしてかゝ

るもので、働くのは金が得たいからで、痛い目に遇はせてやらうと思ふから、人を撲るのです、若し左様でなく、行き當りばつたりで、その日その日の風次第で、それから奈何いふ事が出て来やうなるといふ事を考へずにやるのでは、鳥や獸と違ふ所はありません、いや反つて鳥や獸の方が利口かも知れません、誰にしても斯うすれば斯うといふ事は大抵分るものです、先の先までもよく考へて仕事をすれば決して間違のあるべき筈はないのです、

責任といふ事と因果應報といふ事とは、自から違ひ、如何なる行爲に對しても悉く責任を負はずといふ事はありませんが、如何なる行爲に對しても應報といふ事は皆あります、すべて人間の一切の行動、豫期してした事にしろ、無意識に爲た事にしろ、夢中で爲た事でも、誤つて爲た事でも、すべてそれから生

じた結果は悉くその人に歸すべきもので、例ひ知らずに爲た事でも、それ相應の報いといふものは無くてはならぬものです。

佛教ではこの因果といふ事を能く教へてあります、佛教は悉く因果の道理を教へたものだと言ふ事が出来ます、その最後の果報は佛果で、佛果を得る様な佛因を修するのが、吾々日蓮教徒、法華經主義者の道徳です、

原因あれば結果がある、樂あれば苦あり、今日働けば明日は樂で、今日苦しむのは昨日怠けたからです、この理法は何處まで押して行つても變らないもので、現世で善い事をすれば未來は必ず善い酬があり、現世が苦しいのは前世に爲た事が悪かつたからです、但しこの未來とか前世とかいふ事は甚だ面倒な事で、ある人は無いと云ひ、ある人は有ると云ひます、誰も行つて見た者が無い

のだから、どつちのも斷言する事は出来ません、併し原因結果の理法から押し  
 て行けば、未來も前世も必ず有るに相違ないので、この三世といふ事は能く  
 佛教に説いてあります、吾々生類はこの三世を流轉して、果てしなき渦巻の中  
 に流れて居るのです、若し前世が無かつたら、吾々は何處から來たのでせう、  
 何もない所から急にビヨコンと飛び出して來たのでせうか、併し無から有を生  
 ずるといふ事は不可能の事です、だから過去世といふものは必ず有るに相違な  
 いものです、又この世で種々な事をする、その結果は奈何なるのでせう、若し  
 此の世限りのもので、吾々は死ぬとそのまゝ、灰になつて飛んでしまふものなら  
 悪い事は仕徳、善い事はするだけ損といふ事になります、さうなつたらもうお  
 仕舞でせう、原因があれば必ず結果がある、若し來世といふものが無いとした

ら、この世の中で爲た事の勘定をする所が無くなつて仕舞ふでせう、斯様に考  
 へると、どうしても來世も過去も無くてはならぬもので、又我々の身について  
 考へても、もしこの世限りのもので、偶然生まれて、偶然死ぬのならば、吾々  
 人生は極めてつまらないものでせう、この宇宙は永劫に何億萬年とも限り知ら  
 れない前から存在して、又この先何億萬年も存在して行く、吾々はその間の極  
 く微かな一瞬間一寸出てまたすぐ無くなる埃の様なものに過ぎないとしたら、  
 それこそ全く詰まらないもので、渺たる蒼海の一粟、吾生の須臾なるを悲しむ  
 といふ様な事になつて了ふでせう、永劫の過去あり、永劫の未來有つてこそ、  
 この朝露の如き果敢ない人生も始めて意味が有るので、久遠の過去未來に連續  
 して、その間の關鍵となつてこそ、僅か五十年の人生も、永劫不死の壽命を有

する譯なのです、

吾々は過去の因に依つて、現世に生を受けたのです、従つて現世に爲た事は又原因となつて、來世にその報を受けねばなりません、善果を得るには善因が必要で、我々の最後の目的は成佛です、不死の壽命です、絶對善の境地です、佛果を得るには佛因が要ります、時かぬ種子は生えぬ道理で、手ぶらで居たつて棚から牡丹餅は落ちては來ません、この短かい五十年、瞬く中に過ぎてしまひます、この間に永劫不滅の命を得る様に努めてこそ、一睡の夢に過ぎない五十年も、極めて重大な意義を生じて來る譯なのです、

## 第六章 自由

吾に自由を與へよ、然らずんば死を與へよ」とは米國が獨立戰爭を起した時の全國民の叫びでした、自由といふものは、吾々に取つては極めて大切なもので、或る場合には寧ろ生命よりも大切な事があります、自由を失つては人は生きてゐる甲斐はありません、自由有つてこそ、道徳もあり法律もあり、萬事が生じて來るので、若し自由が無ければ人は器械同様、自由あつてこそ始めて人間ありです、人間の人間たる所以は實に茲に在りとも云ふ事が出來ます、茲にはその自由といふ事を、白蓮主義の上から少しく述べて見ようと思ひます、自由といふ意味を世間では、自分勝手にする事だと誤解して居る人が有ります、少くとも自分の爲たい事を、他から束縛を受けずにする事だと考へて居ます、併しこれは甚だ曖昧な考です、いくら自分の欲する事でも、飛行器にも乗

らないで空を飛ぶ事は出来ず、船なくして大海を渡る事は出来ません、自由とは畢竟、自分の能力の範囲内に於ての事なので、自分の力の及ばない所まで、及ばさうとするのは無理な話です、云ひ換へれば、「自由とは自分の持つてる能力を、何者にも妨げられる事なしに發揮する」と云ふ事です、だから何も泰山を挟んで北海を越える事が出来ず、精衛が海を埋める事が出来ないからとて、決して不自由ではない、自分にそれだけの力を持ち乍ら、それを出す事が出来ないのが不自由なので、花は紅、柳は緑が本性で、もしも花が青くて柳が赤かつたらそれこそ不自由と云ふもんです、

吾々は自由に思ひ、自由に選び、自由に行動するの能力を持つて居ます、此の自由があれば、こそ法律も道徳も有り得るのですが、吾々は猶この上にもつと立派な自由を持つて居ます、それは何かといふに宗教的自由とも名づくべきもので、吾々人間に取つては最も重要な、此の自由あつてこそ外の自由も意味あり、外のすべての自由は失つても、此の自由ばかりは失つてはならないと云ふ自由です、その自由とは一口に云へば、自己心中の佛性を發揮して自在無礙なる事です、この自由こそ人間に取つて眞個の自由で、他の一切の自由は、これに比べれば、まだ束縛されたる自由です、

その「己心の佛性を發揮する」といふ事は已に前に述べました通りですが、自在無礙なる事とは、文の通り、自由自在にして何物にも障げられない事です、障礙物があるから不自由なので、障るものさへ除いたら自由になれる譯でせう、吾々は種々の煩惱業苦に礙げられてゐるから、自由になる事が出来ないのです、



吾々が今日この世界に住んで生存競争に追はれ、優勝劣敗の巻に立つて、一日も安心する事の出来ないのは第一の不自由です、この不自由も依て来る所の原因があるからなので、この障害物を除かねば、何時迄も大自由は得られません、吾々の望む所は、佛性發揮の絶對的自由です、この自由に到れば、吾々はこのつまらない人身から一躍して、自在無礙の佛身となる事が出来るのですが、これは最後の絶對的自由で、この外に吾々の日々の行ひに就いて見ても自由といふものが有ります、謂はゞ相對的自由とも云ふ可きもので、この自由を積んで遂に最後の自由に至るのです、それは、日常行爲に於て、その行爲が佛性發揮の動機から出たものならば、それは自由にした行爲といふ事が出来、即ちその行爲は煩惱や何かの束縛をうけずに、佛性發揮の動機から出たから自由なので、それと反對な行爲は不自由なのです、即ち、この自由不自由といふ事は、善惡といふのと同じ事になります、

例へを舉げてお話しすると、茲に金を百圓持つてる人が有るとします、その人がそれを慈善事業に使はうか、それとも酒食の爲めに費さうかと考へ、遂にそれを養育院へ寄附したとします、すると其人は自分の情慾に妨げられず、佛性發揮の動機によつて行爲をしたのだから、その行爲は自由にしたといふ事が出来るし若しその人がこれと反對に、誘惑に打ち克つ事が出来ないで、卑しい情慾のために囚はれ、飲食のために費つてしまつたら、それは不自由だといふ事になります、斯様に自由といふ事は、佛性發揮の動機といふ事を標準にして定むべきので、善惡といふ事とつまり同じ事になります、

酒を飲むのは不自由になり易い原因です、酔ふた時はどうしても理性の働きが鈍くなり、兎角情慾に囚はれ易く、正しい判断がし憎くなります、従つてどうしても不自由に陥り勝ちです、佛教の五戒に不飲酒戒を立てるのもこの趣意に外ならないので、酒をいくら飲んでも、少しも平生と差ふ事なく、思慮分別し行動する事の出来る人なら差支へないもので、少量づゝは反つて身體の營養になる位のもので、

宗教的自由、日蓮主義の自由とは上述の如きものです、吾々人間にして眞に自由を愛し不自由を排するなら、その方法を講じなければなりません、生を受け難き人身にうけた以上は、早くこの不自由な境遇を去り、最後絶對的の大自然を得たいものでは有りませんか、

已上で日蓮主義の道德の一般をお話し爲た積りですから、次には日蓮上人の言行について、吾々の模範を求めようと思ひます、

### 第七章 日蓮上人の言行

日蓮上人は身を以て法華經を讀まれた方です、一言一行、法華經に依つて言ひ、法華經に因つて行じた、實に法華經の化身です、日蓮上人のせられた通りに行へば、吾々も法華經の如説修行の行者になれるのです、茲には日蓮上人の御遺文の中から、吾々の日々の行爲の手本を求めて、それについて少しくお話し爲度いと思ひます、併し寡聞淺學不徳の私の事ですから、とても廣く充分に引證してお話しする事は困難な次第ですから、眞に日蓮上人に依つて導かれ様

とする志のある人は、更に進んで御遺文全集に就いて研究の歩を進め、正しい信仰の道にお入りになる事を希望致します。

### 第一 慈悲

慈悲と云ふ事は如何なる宗教に於ても重んずる所ですが、日蓮上人も非常にこれを重んじて居られました。

「佛とは何を岩間の菩提、たゞ慈悲心に如くものぞなき」

といふ歌もあります通り、佛とは慈悲の固まり、慈悲の化身で、化城喻品には

「専心佛道常行慈悲」とあり、法師品には「如來室者一切衆生中大慈悲心是」と云

ひ、壽量品には「每自作是念以何令衆生得入無上道速成就佛身」と説かれ、何

れも佛の慈悲の深厚なる事を説いてあります、従つて日蓮上人も慈悲といふ事を専らにせられ、上人御出家より池上御入滅まで、一代の御行動は實にこの慈悲といふ事から發したのであります、八幡鈔の中には

涅槃經に曰く、一切衆生異の苦を受くるは是れ如來一人の苦なりと、日蓮曰

一切衆生の一切の苦を受くるは悉くこれ日蓮一人が苦と申す可し

とあります、上人は終始この覺悟を以て、世の爲め人の爲め、あらゆる迫害をも甘受せられたのであります。

上人の慈悲といふ事に就いては、次の御書に依つてその一般が伺はれます、夫れ五戒の始は不殺生戒、六波羅密の始は檀波羅密也、十善戒二百五十戒十

重禁戒等の一切の諸戒の始は皆不殺生戒なり、上大聖より下蚊虻に至る迄命を財とせざるはなし、これを奪へば又第一の重罪なり、如來世に出で給ひては生を慙れむを本とす(妙密抄)

鳥と蟲とは泣けども涙落ちず、日蓮はなかねども涙ひまなし、此の涙世間の事にはあらず、但偏に法華經の故なり(諸法實相抄)

日蓮は去ぬる建長五年癸丑四月二十八日より今年弘安三年庚辰十二月に至るまで二十八年の間又佗事もなく只南無妙法蓮華經の五字七字を、日本國の一切衆生の口に入れんとはげむ慈悲なり(八幡抄)

經文に我身符合せり、御勘氣を蒙れば愈々悦びを増すべし、例せば小乗の菩薩の未だ斷惡せざるが願兼於業と申して、つくりたくなき罪なれども、父母

等の地獄に墮て大苦をうくるを見て、かたの如くその業を作り願ふて地獄に墮て苦しむに同じ、苦に代るを悦びとす、此も亦是の如し(開目抄)

日蓮が慈悲廣大ならば、南無妙法蓮華經は萬年の外未來迄も流る可し(報恩妙)

日蓮は法華經の智解は天台傳教には千分が一分も及ぶ事なけれ共、難を忍び慈悲すぐれたる事はをそれをも懷きぬべし(開目抄)

法華經第四に曰く若し惡人あつて不善の心をもつて一劫の中に於て現に佛前に於て當に佛を毀罵せん其罪尙輕し、若し人一の惡言を以て出家在家の法華經を讀誦する者を毀謗せんその罪甚だ重し等云云、此等の經文を見るに信心を起し身より汗を流し兩眼より涙を流す事雨の如し、吾一人この國に生れて

多くの人をして一生の業を作らしむる事を歎く(四恩抄)

日蓮上人の慈悲とは、小さな私の慈悲、個人的の慈悲でなくして、もつと大きな法界的の絶対的の大慈悲です、法華經を中心とし、一切衆生をして悉く大安樂を得させようといふ大慈悲です、又上人の慈悲が禽獸にまでも及んだ一例は次の御書に見えて居ます、

又栗鹿毛の御馬はあまりおもしろく覺え候程に、いつ迄も失ふまじく候、常陸の湯へひかせ候はんと思ひ候が、もし人にもぞとられ候はん、又その外いたはしく覺えば、湯より歸り候はんほど、上總の藻原殿のもとにあづけ置き奉るべく候に、知らぬ舍人をつけて候てはおぼつかなく覺え候、まかり歸り候はんまでこのとねりを付け置き候はんと存じ候(波木井殿御報)

### 第二報恩

報恩といふ事も亦極めて大切な事です、若し人間の世界から報恩といふ事を取り去つてしまつたら、随分殺風景な、アフリカの山の中へ行つた様なものになつて終ふでせう、法華經信解品には

世尊は大恩まします、稀有の事を以て憐愍教化して我等を利益し給ふ、無量億劫にも誰かよく報ずる者あらん

と説かれ如來の絶大なる御恩徳を示されてあります、日蓮上人の御一生も一つはこの報恩といふ意味から出たので、三寶の恩を報じ、父母師匠等の恩に報ゆるといふ事が上人の主眼であつたのです、受けた恩を報ずるといふ事は人間

としては當前の義務です、報恩といふ事を知らない者は人間ではありません、夫れ老狐は塚をあとにせず、白龜は毛寶が恩を報ず、畜生すら斯の如し、況んや人倫をや、されば古の賢者豫讓と云ひし者は、劍をのみて智伯が恩にあて、弘演と申せし臣下は腹を割いて、衛の懿公が膽を入れたり、いかに況んや佛教を習はん者、父母師匠國の恩を忘るべしや（報恩抄）

忠孝も愛國も仁義も、皆この報恩といふ意味から生じて來るのです、そしてその報恩も矢張り法華經を中心として成佛を目的とした報恩でなければなりません、日蓮上人の報恩は恩ある人を成佛せしむるにあるのです、本より學文し候ふ事は佛教を究めて佛になり、恩ある人をもたすけんと思ふ、（御勘氣抄）

同五月の十二日に鎌倉を出で、この山に入れり、此れ偏に父母の恩、師匠の恩三寶の恩、國の恩を報せんがために、身を破り命を捨つれども、やぶれざればさてこそ候らへ（報恩抄）

法華經を聽聞して佛の恩徳心肝にそみて、身命をも法華經の御爲に投げて、佛に見せまゐらせんと思ふ（兄弟抄）

我れ釋尊の遺法を學び、佛法に肩を入れしより已來、知恩を以て最とし、報恩をもつて前とす、世に四恩あり、之を知るを人倫と名づけ、知らざるを畜生とす、余父母の後世をたすけ、國家の恩徳を報ぜんと思ふが故に身命を捨つる事敢て佗事にあらず、たゞ知恩を旨とするばかりなり（聖愚問答抄）

又四恩抄には、一切衆生の恩、父母の恩、國王の恩、三寶の恩といふ四恩を

説いて人たる者は必ずやこれらの恩に報いなければならぬと云ふ事を、委しく訓へられてあります、そして上人御遺文の到る處に、人からうけた情に對する感謝の文章があり、殊に俎岩の危急を救つて呉れた船守彌三郎に對しては

日蓮が父母の伊豆の伊東川奈といふ所に生まれかはり給ふか

とまで仰せられてあります、人間が萬物の靈長として尊き所以、實にこの大なる美點を有して居るからであります、

### 第二 忠君愛國

知恩報恩といふ事を重んぜられた上人は、忠君愛國といふ事についても非常

に主張せられて居られます。

外典三千餘卷にも、忠孝の二字こそ詮にて候なれ、忠は又孝の家より出づとこそ申し候なれ、されば外典は内典の初門、この心は内典にたがはず候歟

(法門可申抄)

夫れ外典三千餘卷には忠孝の二字を骨とし、内典五千餘卷には孝養を眼とせり(刑部抄)

總べて日蓮上人の一切の言行は悉く法華經をはなれたものは有りませんが、忠君も愛國もやはり法華經を中心にした忠君愛國であつて、是非善惡に係らずといふのでなくして、君に誤りあらば是を諫め、國にして法に背いて居れば、身命を抛つてもこれを正さずには置かぬといふ忠君愛國です、最後の目的はや

はり成佛じやうぶつです、だから往々わうわうにして君意くんいに背そむき國くにと争あらそふ様な傾向かたむきが見える事こともあ  
りますが、それは忠言耳ちゆうげんみみに逆さからひ、良薬口りやうやくくちに苦にがしの類るみであつて、一時じは反對はんたいに  
見えても、結局けつぎよくは大忠君大愛國だいちゆうくんたいあいこくなのです、四條金吾しじょうきんごに與あたへた御書ごしよの中には、君  
に仕ふるの心得こころえを示して

たとひ上かみは御信用無ごしんじようなき様に候まうとも、殿とのの御内ごうちに御座おはして其御恩そのごおんの影かげにて法華  
經きやうを養やしほひまゐらせ候まうへば、偏ひとへに上かみの御祈ごいのりとなり候まうらん、大木たいぼくの下したの小木せうぼく、大  
河がのほとりの草くさは、正ただしくその雨あめに當あたらず、その水みづを得えずといふとも、露つゆを  
傳つたへ氣きを得えて榮さかふる事ことに候まう、これも是かくの如ごとく阿闍世王あじやせわうは佛ほとけの御敵ごんてきなれども、  
その内うちにありし耆婆きば大臣だいじん佛ほとけに志こころざしありて常つねに供養くやうありしかば、その功大王こうだいわうに歸き  
すところ見みえて候まうへ(崇峻天皇抄)

と説とかれ、君きみにして誤あやまりあらばこれいを諫いさめて正法しやうはふに入いらしむ可べき事ことを、御書ごしよの到いた  
る所ところに説とかれてあります、

汝なんぢ若もし知恩ちおんの望のぞみあらば、深ふかく諫いさめ強こひて奏そうせよ、非道ひだうにも主命しゅめいに従したがはんと  
いふ事こと、佞臣ねいしんの至いたり不忠ふちゆうの極きはまり也なり、般いんの紂王ちゆうわうは惡王あくわう、比干ひかんは忠臣ちゆうしん也なり、政まつりごと  
理りに違たがひしを見みて強こひて諫いさめしかば即すなはち比干ひかんは胸むねを割さかる、比干ひかん死しして後周のちしゆう  
の王わうに討うたれぬ、今の世よまで比干ひかんは忠臣ちゆうしんと云いはれ、紂王ちゆうわうは惡王あくわうと云いはる、夏  
の桀王けつわうを諫いさめし龍蓬りゆうほうは頭かぶを切きられぬ、されど桀王けつわうは惡王あくわう龍蓬りゆうほうは忠臣ちゆうしんといふ、  
主君しゅくんを三度たび諫いさむるに用もちひずば山林さんりんに交まじはれとこそ教をへたれ、何なんぞその非ひを見  
乍なら黙かくせんと云いふや、古いにしへの賢人けんじん世よを遁のがれて山林さんりんに交まじはる先規せんきを集あつめて、聊いさか  
汝なんぢが愚耳ぐにに聞きかしめん、般いんの世よの太公望たいこうぼうは幡溪はんけいといふ谷たにに隠かくる、周しゆうの世よの伯



夷叔齊は首陽山といふ山に籠る、秦の綺里季は商山に入り、漢の嚴光は孤亭に居し、晋の介子綏は綿上山に隠れぬ、此等をば不忠といふ可きか、愚かなり、汝忠を存せば諫む可し、孝を思はば云ふ可きなり（聖愚問答抄）

義朝と申すは故右大將家の慈父なり、子を敬ひ奉れば父をも敬ふ可き事ぞかし、然れ共いかなる人々も義朝爲義なんど申すぞ、これ則ち王法の重く、逆臣の報いなり（淨蓮房抄）

宮仕へを仕る者上下ありと申し候へ共、分々に従つて主君を重んぜざるは候はず、御爲に現世後生悪くわたらせ給ふ可き事、竊かに承はり知りて候はんはんに傍輩に憚り申し上げざらんは與同罪に候はん歟、本文の如くなるべく候（頼基陳狀）

日蓮主義の忠君とは斯様なものです、飽く迄も男らしい、女々しくない、真正の意味に於ける忠君です、

又愛國といふ事も同様で、法華經に結び付けた日本國を愛し、日本國を法華經に依つて淨化せしめようといふ愛國です、

夫れ國は法に依つて昌へ、法は人に依つて貴し、國亡び人滅せば、佛を誰か崇む可き、法を誰か信ず可けんや、まづ國家を祈りて須らく佛法を立つ可し

（安國論）

帝王は國家を基として天下を治め、人臣は田園を領して世上を保たん、而も佗方の賊來つて我國を犯し、自界叛逆して其地を掠領せば豈驚かざらんや、豈騒がざらんや、國を失なひ家を亡ぼし、何の所に世を遁れん、汝須からく

一身の安堵を思はゞ、先づ四海の静謐を祈る可きもの歟（安國論）

一切の大事の中に國の亡びるは第一の大事に候也（蒙古使御書）

日蓮世間の體を見て粗、一切經を考ふるに、御祈請驗なく還つて凶惡を増長するの由道理文證之を得了んぬ、終に止む事なく勘文一通を作り作して、その名を立正安國論と號す、文應元年庚申七月十六日辰時、屋戸野入道に付して故最明寺入道殿に奏進し了んぬ、此れ偏へに國土の恩を報ぜんが爲めなり

（安國論由來）

早く邪法邪教を捨て、實法實教に歸す可し、若し御用ひなくんば今世には國を亡ぼし身を失ひ、後生には必ず那落に墮すべし、速かに一處に集まつて談合を遂げ評議せしめ給へ日蓮庶幾せしむる所なり、御報に依つてその旨を存

すべく候處なり、敢て諸宗を蔑するに非ず、但この國の安泰を存する許り

なり（與長樂寺御書）

日本國の歴史あつて茲に三千年、その間に上人ほど國を愛した人はないでせう眞の忠臣眞の愛國者は實に聖人一人といふも敢て言ひ過ぎでは有りません、開目抄に於て「我れ日本の柱とならん、我れ日本の眼目とならん、我れ日本の大船とならん等と誓ひし願破るべからず」と宣言せられた通り、上人は實に此の心を以て心とせられ、日本國を妙法に依つて淨化し、日本國を中心として世界を本化的に統一して一佛土とし、事の寂光土を此の土に現前したいと云ふ理想を以て居られたのでした、

汝早く信仰の寸心を改めて速かに實乗の一善に歸せよ、然れば則ち三界は皆

佛國なり、佛國それ衰へんや、十方は悉く寶土なり、寶土何ぞ壞れんや、國に衰微なく土に破壊なくんば、身はこれ安全にして心はこれ禪定ならん、此の詞此の言、信ず可く崇ぶべし（安國論）

法華經を以て國土を祈らば、上一人より下萬民に至るまで、悉く悦び榮え給ふべき鎮護國家の大白法也（初心成佛抄）

これが上人の國家に對する理想です、上人は實に真正なる意味に於て國家を愛護されたのです、

### 第四 孝 養

孝養といふ事は忠君と同じ意味に於て、最も重んずべき人生の大道です、上

人御遺文の中には到る處にこれを説かれてあります、

外典三千餘卷の所詮に二あり、所謂忠と孝となり、忠も亦孝の家より出でたり孝と申すは高なり、天高けれ共孝よりは高からず、地厚けれ共孝よりは厚からず、聖賢の二類は孝の家より出でたり、いかに況んや佛法を學せん人、知恩報恩なかるべしや、（開目抄）

外典三千餘卷卷佗事なし、唯父母の孝養計りなり、然れども現世を養ひて後世を資けず、父母の恩の重き事は大海の如し、現世を養ひ後世を資けざれば一諦の如し、内典五千餘卷卷佗事なし、たゞ孝養の功德を説けるなり（上野殿御返事）父母の家を出で出家の身となるは、必ず父母をすくはんが爲めなり（開目抄）不孝の者を五逆罪の者とは申し候か、又相似の五逆と申す事も候（法門可申扮）

尙この類の御文章は非常に多くあります、そして上人は父母を養ふのみを以て孝養とせず、更に進んで大安心を與へ、成佛の道に入らしめる事を以て、孝養の最大なるものとせられて居ります

孝養に三種あり、衣食を施すを下品とし、父母の意に違はざるを中品とし、功德を回向するを上品とす、況んや亡親に於いてをや（十王讚嘆抄）

孝に二あり、世間の孝の孝不孝は外典の人々これを知りぬべし、内典の孝不孝はたとひ論師等なりとも、實教を辨へざる權教の論師の流をうけたる末の論師などは後生知りがたき事なるべし（法門可申抄）

それ教主釋尊をば大覺世尊と號し奉る、世尊と申す尊の一字をば高と申す、高の一字は又孝と訓ぜり、一切の孝養の人の中に第一の孝養の人なれば、世尊と

は號し奉る（法蓮抄）

孝經と申すに二あり、一には外典の孔子と申す聖人が書ける孝經也、二には内典今の法華經是れ也、内外異りと雖、その意はこれ同じ（法蓮抄）

要するに上人の孝養は法華經から出た孝養です、法華經を内典の孝經なりと仰せられたあたりは、最もよく上人の孝に對する御意見を現はして居ると思ひます、そして上人御自身は最も孝養の念の厚き方でありました、故郷の方から海苔を送られては父母の事を思ひ出して涙を流し、

今このあまのりを見候ひてよしなき、心思ひ出で、うくつらし、片海市河こみなとの磯のほとりにて昔見しあまりの也、色形味も變らざるが、など吾が父母かはらせ給ひけん、かたちがへなるうらめしさに涙も押さへ難し（新

抄)

と仰せられたのは實に上人の眞情の溢れ出た所です、そして身延の山に御隠尼  
 栖の後も、毎日必ず一度づつ、雪降り積る寒さにも、照りつける夏の炎天にも  
 御草庵の後の山に、五十餘町の險岨な道をお登りになつて、遙かに故郷小湊の  
 方を伏し拜まれ、御兩親の墓を遙拜なされたといふ事で、今でもその跡が思親  
 閣となつて残つて居りますが、實に斯く迄に孝養の念の厚い方は、日本は愚か  
 世界中探しても、外にはありません、經には『恩を捨て、無爲に入るは眞實  
 報恩の者なり』とあります、上人こそ實に眞實の大孝養のお方でありませう、  
 若き夫妻等が夫は女を愛し、女は夫を絲惜む程に、父母のゆくへを知らず、  
 父母は衣薄けれ共われはねやあつし、父母は食せされ共我は腹に飽ぬ、是は

第一の不孝なれ共、彼等は失とも知らず、況んや母に背く妻、父にさかへる

夫重罪にあらずや(一谷抄)

この聖訓に至つては實に深く服膺しなければならぬ、現在社會の人達にと  
 つては頂門の一針ではありませんか、母を持てる女、父を持てる男、果してこ  
 の聖訓に違はない事を公言し得る人が何人ありませうぞ、實に深く深く考へな  
 ければならぬ、重大な事柄なのであります、

第五 師孝

佛教とは主師親の三徳といふ事が説いてあります、それは、釋迦牟尼佛は一  
 切衆生のためには主たり師たり親たり、大慈大悲の心を以て、吾々凡夫を克く

救護し誘導して行かれるといふ事なので、吾々の終の親とはこの佛、主人とはこの佛で、そして又最後の師匠とは實にこの佛なのであります、だからして忠も孝も亦師孝も詮ずる所は、皆佛に歸するのであります、師に仕へるといふ事は極めて大切な事で、譬喩品には『惡知識を捨て、善友に親近す』と説いてあります、

佛になる道は善知識には過ぎず、わが智慧何かせん、たゞ温寒ばかりの智慧だにも候ふならば善知識大切也、而るに善知識に遇ふ事は第一の難事なり然らば佛は善知識に遇ふ事をば、一眼の龜の浮木の穴に入り、梵天より下す糸の、大地の鍼の目に入るに譬へ玉へり、然るに末代惡世の惡知識は大地微塵より多く、善知識は爪上の土よりも少なし(三藏祈雨抄)

實に佛になる道は、師に仕ふるには過ぎず、妙樂大師弘決の四に曰く、若し弟子ありて、師の過ちをあらはさば、もしは實にも若しは不實にも、その心自ら法の勝利を壞失す、云云、文の心は若し弟子ありて師のあやまちを見はさば、若しは實にもあれ、若しは虚言にもあれ已にその心あるは、身自ら法の勝利を壞り失ふ者也云云、又止觀一に曰く、如來惡惡にこの法を稱嘆し給へば聞者歡喜す、常啼は東に請じ、善財は南に求め、藥王は手を燒き、普明は頭を刎らる、一日に三度恆河砂の身を捨つるとも尙一句の力を報ずる事能はず、況んや兩肩に荷負し、百千萬劫すとも寧ろ佛法の恩を報ぜんや(身延記)

有智の高徳を畏れ、老いたるを敬まひ、幼なさを愛するは内外典の法也(新

池抄)

佛ほとけになる道みちを求めんがために師しを擇えらび求め、一旦たんし師しと頼たのんだ上うへからは飽あくまでもこれを敬うやまひ尊たつとび、その恩おんを報はうじなければならぬのです、日蓮上人にちれんしやうにん御自身ごしんは亦また極めて師孝しかうの厚あつかつた方で、身延山みんげんざんに御隱居ごいんきよの後のち返かへりも常に舊師道善坊きゆうしだうぜんぼうの恩おんを想おもふて居ゐられました、

されば花はなは根ねにかへり、真味しんみは土つちに止とどまる、此功德このくどくは故道善坊こだうぜんぼうの聖靈しやうれいの御身ごんみに集あつまるべし(報恩抄)

御ごんまへと義淨房ぎじやうぼうと二人にん、是御房このごぼうを讀手よみてとして、山やまの高み森もりの頂いたきにて二三邊さん又故道善坊またこだうぜんぼうの御墓ごんはかにて一遍讀べんよませさせ給たまひては、此御房このごぼうに預あづけさせ給たまひて常に御聽聞候ごちやうもんまうらへ(報恩抄送文)

又道善房まただうぜんぼうのみならず、御自身ごじしんの經釋きやうしやくに據より所ところなる天台大師てんだいだいしの御恩德ごおんとくに就ついても、次つぎの様な御文章ごぶんしやうが有あります

予よすでに六十むそに及び候およへば、天台大師てんだいだいしの御恩報ごおんほうじ奉たてまつらんと仕つかまつり候間そうあひだ、見苦みやぐるしげに候房そうぼうを引ひきつくるひ候時まふらふときに、さくれうに下くだして候まふらふなり、錢四貫ぜにくわんをもちて一閻浮提第一えんぶだいの法華堂ほつげだうを作りたりと、靈山淨土れいざんじやうどに御ごんまゐり候まゐはん時は申まをし上げさせ給たまふ可べし(富木抄)

### 第六 夫婦兄弟

男をとこは柱はしらの如ごとく女をんなは桁けたの如ごとく、男をとこは足あしの如ごとく女をんなは身みの如ごとく、男をとこは羽はねの如ごとく女をんなは身みの如ごとく、羽はねと身みと別べつ々になりなば、何なにを以もつてか飛とぶべき、柱はしら倒たふれなば桁地けたち

に落ちなん、家に男なければ人に魂なきが如し(阿佛房抄)

矢のはしるは弓の力、雲の行く事は龍のちから、男のしわざは女の力なり、

今富木殿のこれへおわたりある事尼御前の力なり(富木尼抄)

夫唱婦隨は人倫の大道です、上人は夫婦相和し相輔くべき事を、上の様に説

かれてあります、そして夫婦間の關係についてもやはり法華經が中心です、法

華經に依つて結合し、法華經に依つて夫婦の間柄といふものが神聖なるものに

なるのです。

生々世々の間契りし夫は大海のいさごの數よりも多くこそおはしまし候ふら

め、今度のちざりこそ實の契りの男ぞ、その故は男のすゝめによりて法華經

の行者とならせ給へば、佛とをがませ給ふ可し(上野抄)

妙壯嚴王品と申すは殊に御爲めに用事也、妻が夫をすゝめたる品なり、未代

に及んでも女房の男をすゝめんは、名こそかはりたりとも、功德は但淨徳夫

人の如し(品々供養抄)

女人となる事は、物に隨つて物を隨へる身なり、夫たのしくば妻もさかふべ

し、夫盗人ならば妻も盗人なるべし、是れ偏に今生ばかりの事にはあらず、

世々生々に影と身と華と果と根と葉とにておはするぞかし(兄弟抄)

法華經の御名によつて結び付いた夫婦ほど、固い誠の契りはないのです、夫

婦喧嘩をしたり、いまはしい離婚沙汰などのあるのは、その夫妻關係が清く

ないからで法華經によりて淨化せられ、固められた夫婦ならば、是程頼もし

いものはありません。



又兄弟の間に就いては、次の様な御書が有ります、  
 父母夫妻兄弟諍ふ事、獵師と鹿子と猫と鼠と鷹と雉と見えて候、良觀等の天  
 魔の法師等が、親父左衛門太夫殿をすかし、和殿ばら二人を失はんとせしに  
 殿の御心賢くして、日蓮が諫言をお用ひありし故に、二の輪の車を扶け、二  
 の足の人をになへるが如く、二の羽の飛ぶが如く、日月の一切衆生を扶くる  
 が如く、兄弟の御力にて親父を法華經に入れまゐらせ給へる御計らひ、偏  
 へに貴邊の御身にあり(四條抄)

第七 正直勤勉

正直と勤勉とは、人として守らざる可からざる徳です、經には正直捨方便と

説き、勇猛精進と教へられてあります、日蓮上人の御歌に、

おのづから、よこしまに降る雨はあらじ、風こそ夜のまどは打つらめ  
 といふのがあります、まこと、正直の頭に神宿ると申す詞もあります程で、正  
 直といふ事さへ守つて行けば、人は間違はないのであります、

約束と申すはたがへぬ事にて候(上野抄)

水は濁りて流るれ共、本清ければ又反つて清くなりぬる様に、人は怨をなせ  
 ども本より心すぐなれば、佛神守を加へ給ふなり(垂迹法門)

心の師となるとも心を師とせざれとは六波羅密經の文ぞかし(曾各抄)

又勤勉といふ事については、

強盛にはがみをなしてたゆむ心なかれ、例せば日蓮が、平ノ左衛門尉がもと

にうち振舞ひ云ひしが如く、少しもどづる心なかれ(兄弟抄)

千年のかるかやも一時に灰となし、百年の功も一言に破れ候は、法のことは  
りなり(兵衛志抄)

凡そ日蓮上人ほど正直で又勤勉であつた方はありません、本佛釋尊の眞實  
の御言を正直に守らんがために、古今稀なる御難儀もせられたので、又その  
ために六十年の御生涯、寢食をも忘れて奮勵努力せられました、もしも吾々に  
して上人の百分の一も勉める事が出来れば、吾々は實に現今社會の第一流の人  
物になる事が出来るでせう、

## 第八 剛毅謙遜

剛毅と謙遜、これは相反對せる事柄であつて、そして又相伴ふべき徳操です、  
剛毅といふ點のない人は柔弱用ふるに足りない人で、謙遜を知らない人は、最  
も卑しむ可きつまらない人格です、心中に鐵石の如き覺悟、信念があれば、そ  
れを貫くためには飽く迄も剛毅なるべく、それを妨ぐる障害物があれば、いか  
にしてもこれを排除して通る可き大勇猛心が無くてはならぬ譯です、そして又  
自己に信ずるの所あり、一心決定しては自分の責任を思ひ、自己の力量を省み  
て何處迄も謙遜なるべき筈です、『雄飛せんと欲する者は先づ雌伏す』といふ語  
もあり、『實る程頭を下ぐる稻穂哉』といふ句もあります、剛毅の人は謙遜の美  
徳を具へ、謙遜なる一面には剛毅でなければなりません、唯剛毅といふ方面ば  
かり有つても謙遜でないのは、暴虎馮河の勇になり、謙遜ばかりで剛毅のない

人は、女の腐つた様な骨無しはねなしの柔弱漢にうじやくかんです、併し剛毅かうぎといふ事は往々にして誤解され易い事で、内に確固とした恃む所あつて、そのために勇氣があり、挫けないといふのは剛毅ですが、中味も何もない空ツボのくせに、空威張りをするのには剛毅でも勇氣でも何でもない匹夫の勇です、又自分には何もなく、人が怖くて無暗にお辭儀をしたり、何か卑しい目的のために人にへり下るのは謙遜でなくして卑屈です、剛毅と亂暴と、謙遜と卑屈とは、同じ様に見えても天地雲泥の相違です、丁度節儉と吝嗇との違ひの様なものです、日蓮上人はこの點に於ては最もよく兩方面の調和の模範を示して居られます、

風大なれば波大なり、龍大なれば雨猛き様に、いよくあだをなし益々憎みて御評定に僉議あり、頸をはぬべきか、鎌倉を追はるべきか、弟子檀那等を

ば、所領あらん者は所領を召して頸を切れ、或は牢にて責め、或ひは遠流すべし等云云、日蓮悦んで曰く、本より存知の旨なり、雪山童子は半偈のために身をなげ、常啼菩薩は身をうり、善財童子は火に入り、樂法梵志は皮をはぐ(種々御振舞抄)

日本國に法華經を讀み學する人はこれ多し、人の妻を奪ひ盗み等にてうはらはるゝ人多けれども、法華經のためにあやまたるゝ人は一人もなし、されば日本國の持經者は名ばかりにて、未だこの經文には値はせ給はず、但日蓮一人こそ讀侍れ、我不愛身命但惜無上道是れなり(南條抄)

さて平の左衛門尉が一の郎従少輔房と申す者走り寄つて、日蓮の懷中せる法華經の第五の巻を取り出して、おもてを三度さいなみ、敗々にうち散らす、

又九卷の法華經を兵どもうち散らして或ひは足を踏み、或ひは身に纏ひ、或ひは板敷屋等、家の二三間に散らさぬ所もなし、日蓮大音聲を放ちて申す、あら面白や平の左衛門尉が物に狂ふを見よ、殿原唯今日本國の柱を倒すよとよばはりしかば、上下萬民あはて、見えしなり(種々御振舞抄)

各々思ひ切り給へ、此の身を法華經に替ふるは石に金を替へ、糞に米を替ふるなり、佛滅後二千二百二十餘年の間迦葉阿難等、馬鳴龍樹等、南岳天台妙樂傳教等だにも未だ弘め給はざる法華經の肝心諸佛の眼目たる妙法蓮華經の五字、末法の始めに一閻浮提に弘まらせ給ふべき瑞相に日蓮魁したり、和黨共二陳三陳つゝいて迦葉阿難にも勝れ、天台傳教にも越えよかし、僅の小島の主等が威さんにて恐れては閻魔王の責をばいかがすべき、佛の御使ひと名乘

り乍ら臆せんは無下の人々也(種々御振舞抄)

當時日本國を左右して居た執權北條氏を僅の小島の主と罵り、猛然天下を濶歩して恐るゝ所のなかつた上人は、一面には又非常に謙遜な點を有して居られます、

日蓮は無戒の比丘なり、法華經は正直の金言なり、毒蛇の珠をはき、伊蘭の梅檀をいだすが如し(單衣抄)

日蓮今生には貧窮下賤の者と生まれ、梅陀羅が家より出でたり、心にこそ少し法華經を信じたる様なれ共、身は人身に似て畜身なり、魚鳥を混丸して亦白二滯とせり、その中に識神を宿す、濁水に月の寫れるが如し、糞糞に黄金を包めるなるべし(佐渡御書)

この御文章に至つては實に謙遜の極みとでも申しませうか、天下に何物の恐るべきものもなかつた、上人は、實にかゝる謙遜な御心持を持つて居られたのでした、斯かる大美徳があつたればこそ、當時の天下に立つて、宗教界の大革命者となられる事が出来たのでありませう、

### 第九 大義名分

『大義親を滅す』といふ語があります、大義名分といふ事は非常に大切な事で若しこれが紊れる事になると、世の中秩序は破壊され、安寧幸福は失せて、闇黒の世になつてしまふでせう、日蓮上人は佛法の上から大義名分といふ事について力を込めて盡されました、

各々思へらく、宗を立つる法は自宗をほめて、佗宗を嫌ふは常の習ひなりと思へり、法然などは又この例を引いて、曇鸞の難行易行道綽の聖道淨土、善導が正雜二行の名目を引いて、天台眞言等の大法を念佛の方便となせり、此等は牛跡に大海を入れ、縣の額を州にうつすものなり、世間の法には下剋上背上下向は國土亡亂の因縁なり、佛法には權小の經々を本として實經をわなづるは、大謗法の因縁なり(善無畏抄)  
日蓮上人は當時各宗各々勢ひを張り、本佛釋尊の本旨に背いて色々の邪義を入れたり、佛法であり乍ら教主釋尊を蔑にしたり何かして、丁度天に二日あり一國に二人の王がある様な混亂の有様を見て、非常にこれを慨かれ、身命を捨て、大義を正し、名分を明かにする事に盡されました、そしてその教法の

上からして又、臣下の身として一天萬乗の君を流し奉つたり何かするのは、これ實に教法に於て大義名分の明らかにされない故であるとして、それを正す事に非常に努力して居られます、上人一生の御事蹟も、大本はこのためで、御遺文を拜しても過半はこの事について述べられています、例の有名な四箇の格言、念佛無間、禪天魔、眞言亡國、律國賊、諸宗無得道といふ語も、皆教主釋尊の本意に背いた教法がはびこり、或ひは自己の教主を捨て、佗方の阿彌陀佛や大日如來を頼み奉る大非法、大下尅上を正さんがためにお叫びなされた御言葉なのです、

世間を見るに各々吾も吾もと云へども、國主はたゞ一人なり、二人となれば國土をだやかならず、家に二主あればその家必ずやぶる、一切經も亦かくの

如くやあるらん、而るに十宗七宗まで各々諍論して随はずば、國に七人十人の大王あつて萬民おだやかならじ(報恩抄)

彼々の經々と法華經と勝劣淺深成佛不成佛を判ぜん時、爾前迹門の釋尊なりとの物の數ならず、況んやそれ已下の等覺の菩薩をや、まして權宗の者共をや、法華經と申す大梵王の位にて民とも下し鬼畜なんど、下してもその過ちあらんやと心得宗論すべし(教行證抄)

娑婆世界の佛といふは世に二佛なく、國に二王なきは聖教の通判なり、涅槃經三十五卷を見る可し、若し佗土の佛なりと云はゞ何ぞわが主師親の釋尊を蔑にして佗方疎縁の佛を崇むるや、不忠也不孝也逆路迦耶陀なり(眞言見

聞)

此の法華經の始めに無量義經と申す經おはします、譬へば大王の行幸の御時將軍前陣して狼籍をも鎮むるが如し、その無量義經に曰く、四十餘年未顯眞實等云云、此は將軍が大王に敵する者を大弓を以て射はらひ、又太刀を以て切り捨つるが如し（上殿殿母抄）

大義名分といふ事は日本國民として、又法華經の行者として、最も意を注がなければならぬ重大問題なのであります。

### 第十 醇要統一

日蓮主義は醇要主義です、統一主義です、日蓮主義に於ては、この二つは大切な事です、

一部八卷廿八品を受持讀誦し、隨喜護持するは廣なり、方便品壽量品等を受持し乃至護持するは略なり、唯一四句偈乃至題目計りを唱へ護持するは要なり、廣略要の中には要が中の要也（題目抄）

玄奘三藏は略を捨て、廣を好み、四十卷の小品經を六百卷となす、羅什三藏は廣を捨て、略を好み、千卷の大論を百卷となせり、日蓮は廣略を捨て、肝要を好み、所謂上行所傳の妙法蓮華經の五字也（法華取要抄）

如何なる大國と雖、集まる所はその首都です、扇はかなめに依つて纏つて居るので、それを取ればバラバラになつて了ひます、その首都に至り、その要を取れば、その國全體を知り、その扇を押さへる事が出来るので、何事についてもその全體を知り、その悉くを把るといふ事は仲々出來難い、又爲てもあまり

價値のない骨折仕事で、それよりもその物全體を得べきその精髓を握れば、尤も便利なわけです、又廣さを求めて結局不得要領に終つて了ふのでは何にもなりません、要の中の要を尋ね、此處だといふ所を掴まへさへすれば好いので、徒らに廣さを誇るのは馬鹿の骨頂です、殊にこの日進月歩の忙しい世の中に於ては、何事によらず、事物の眼目肝要を得る事が尤も必要なのであります、問ふ汝何ぞ一念三千の觀門を勸進せずして、唯題目ばかりを唱へしむるや、答へて曰く日本の二字に六十六國の人畜財を攝盡して一も残さず、月氏の兩字に豈七十箇國なからんや(四信五品抄)

妙法蓮華經の五字は經文にわらず其義にわらず唯一部の意のみ(同前)

日蓮上人は實に要が中の要を求め、それを世上の人達に得させようと苦心さ

れたのであります、

として又、廣を要に歸し、一教主一實教の下にすべてを集める所から統一主義です、教の淺深勝劣を定め、廣略の中から肝要を求めては、どうしても、一切のものを勝れたもの、肝要のもの、下に統一する様にならなければならぬのは自然の理です、天に二日なく、國に二王のない原則から行けば、宗教も亦一教の下に統一せらるべきが當然でせう、上人はこの宗教統一といふ事を目的とせられたので、一天四海皆歸妙法、閻浮統一は實に上人の理想とせられた所で、これ亦釋尊の御本旨、法華經の元意なのであります、上人はまづこの日本國を靈的に統一し、そしてそれを外に押し廣めて世界を統一し、この世界上に事の寂光土を現出したいといふのが御本意なのであります、



法華折伏破權門理の金言なれば、遂に權教權門の輩を一人もなく責め落して  
 法王の家人となし、天下萬民諸乘一佛乘となつて、妙法ひとり繁昌せん時、  
 萬民一同に南無妙法蓮華經と唱へ奉らば、吹く風枝をならさず、雨土壤を碎  
 かず、世は義農の世となりて、今生には不祥の災難を拂ひ、長生の術を得、  
 人法共に不老不死の理あらはれん時を御覽ぜよ、現世安穩の證文疑あるべ  
 からざるもの也(如說修行抄)  
 以上で甚覺束ない乍ら、日蓮上人の御書についてお話し致しました、然しこ  
 れは極めて萬分の一、九牛の一毛にも足りない僅のものです、もし眞に御志  
 のある方は、御遺文全集によつて更に充分の研究を積み、大利益を得られん事  
 をお勧め致します、

明治四十四年五月十二日印刷

明治四十四年五月十五日發行

日蓮主義之道德

定價貳拾錢

著	作
所	權
有	作

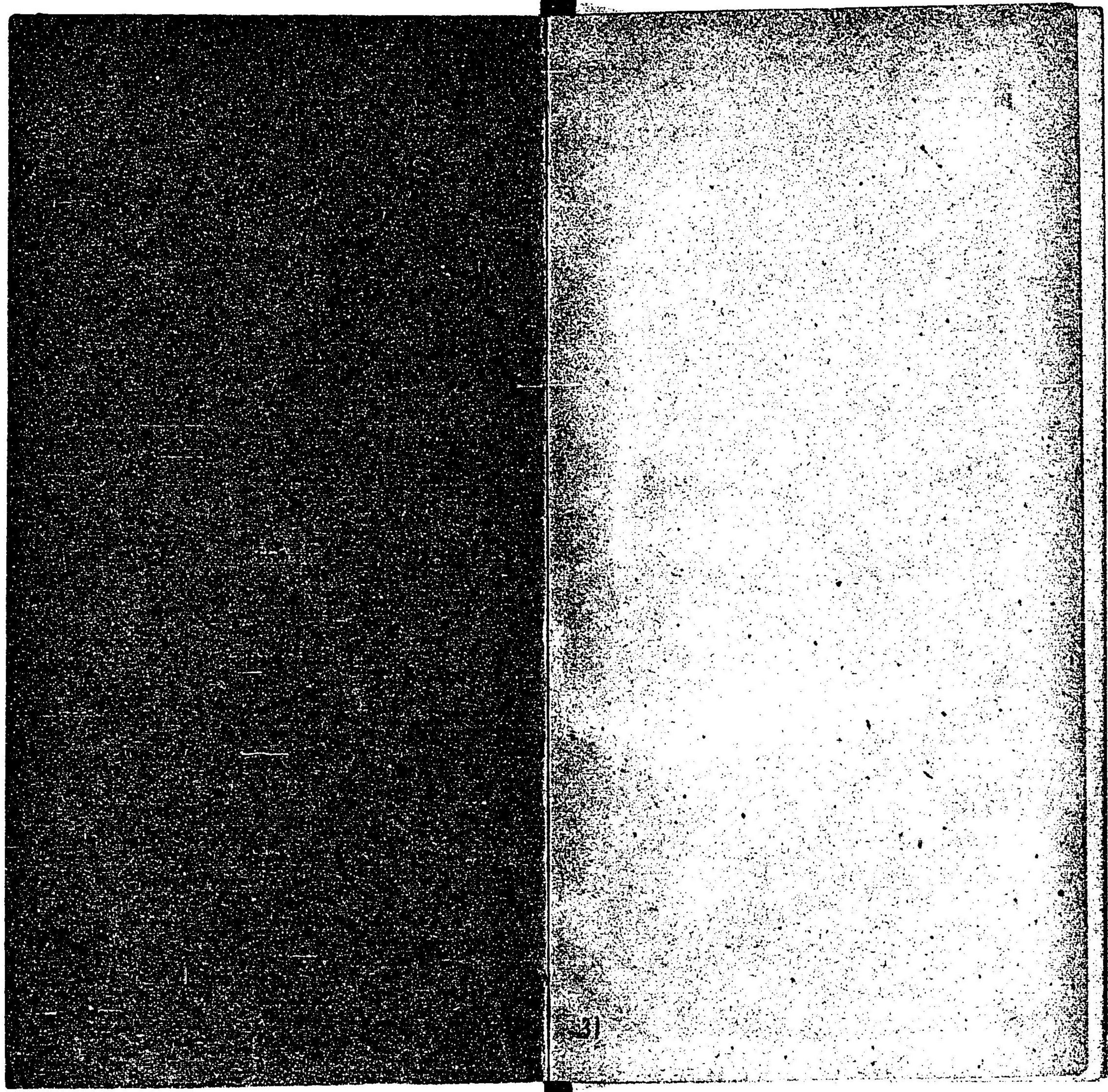
著者 齋藤 舜 榜  
 發行所 東京府荏原郡大井町千三百五番地  
 發行所 馬場 聰 吉  
 發行所 東京府荏原郡大井町千百〇五番地  
 發行所 濱川 堂 書 店  
 印刷者 東京市京橋區南小田原町二丁目九番地  
 印刷所 中野 鏝 太 郎  
 印刷所 東京市芝區愛宕町三丁目二番地  
 東洋印刷株式會社

大販賣所

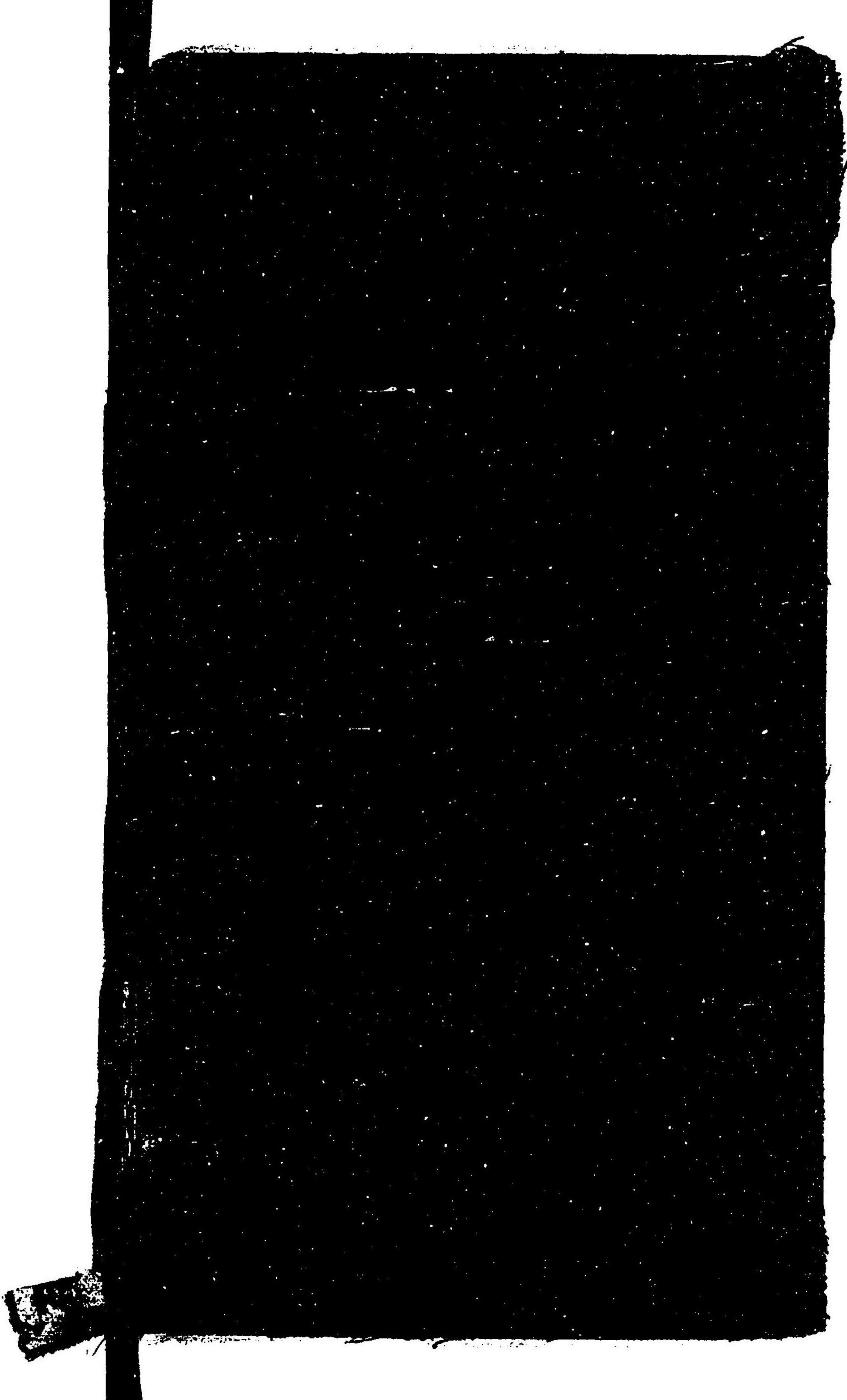
東京市日本橋區  
數寄屋町九番地

六合館書店

電話 本局 五三三  
 振替貯金口座番號 三三七一  
 電話 本局 五三三  
 振替貯金口座番號 三三七一



82
697



020042-000-8

82-697

日蓮主義之道德

齋藤 舜楞 / 著

M44.5

ABH-0237



